

# トルキスタンを歴史化する： ロシア統治と『トルキスタン史』

## Historicizing Turkistan: Russian Rule and Mullā ‘Ālim’s *Ta’rīḥ-i Türkistān*

木村 暁

はじめに

- I. 統治空間としてのトルキスタン
- II. ムッラー・アーリムと『トルキスタン史』
- III. 『トルキスタン史』におけるトルキスタンの歴史化  
おわりに

### はじめに

トルキスタンという地理的な呼称が実用語彙に組み入れられた背景に、6世紀における突厥可汗国の勃興があったことは疑いない。同世紀後半にモンゴル高原を中心として、東は大興安嶺から西はカスピ海北岸、南はタリム盆地ならびにソグディアナをも支配下に収めたこのテュルク人の遊牧国家は、南側からこれと対峙し、あるいはその領民となったイラン系定住民の心象地理において強烈な存在感を示したことだろう。トルキスタンの語は、「テュルク／トルコ (Türk/Turk)」という集団名称に、空間や時間を表す名詞を形成する接辞「(イ) スターン (-i)stān」<sup>1</sup>が接合してできた、イラン語における造語であり、「テュルク人の地」を意味する。すなわち、その発端においてトルキスタンは、イラン系言語を母語とする人々が他称として用いた呼称であった。史料上における比較的早い言及例のうち、639年発行のソグド語契約文書の用例にしたがえば、当時トルキスタンはおおむねシル川の以北と以東に広がる大草原地帯を指していたものと考えられる(吉田ほか1989: 7, 14-15)。

トルキスタンが特定の間人集団の活動・居住・支配領域と結びついた概念であるからには、それ

---

1 ここでの「イ (-i)」は、語末が子音の単語に接続する場合に現れる介入母音。

が指し示す地理的範囲に、当該集団すなわちテュルク（トルコ）人の動向は影響を与えずにはおかなかった。ロシアの東洋学者 V. V. バルトリド(1869–1930)はこう述べる。「突厥遊牧帝国とサーサーン朝イラン国家の境界はアム川と見なされていた。こうして、イラン人にとってアム川以遠の地域はトルキスタン、すなわち「トルコ人の地」という本来の意味におけるトルキスタンとなったのである」(バルトリド2011(1): 39–40)。これは630年頃の地政学的状況を念頭に置いた記述<sup>2</sup>であるが、このときサーサーン朝のイラン人（ペルシア人）の目にアム川以遠（以北）がトルキスタンとして映っていたとすれば、上述のような、ほぼ同時代のソグド人の地理認識とのあいだには境界のとらえ方をめぐって大きな隔たりがあったことになる。

人間の認識によってこそ地域は創出され存立するという構築主義の見地（宇山2008: 12–14）からみるならば、それは至極当然のことといえる。地域は、認識主体の帰属先や立場、時代状況などの諸要因の作用を受けながら、じつに多様な像を結びうるからである。トルキスタンもまた例外ではなく、発祥時から近代に至るまでの長きにわたって、ある独特の傾向を示しながらその領域の伸縮と重心移動を繰り返してきた。このトルキスタンの名称を明示的な境界線をともなう政治・行政単位に対して史上初めて適用したのは帝政ロシアであり、その中央アジア南部の征服地にトルキスタン総督府が創設されたのを機に、トルキスタンはロシア人総督の威令がおよぶという意味で明確な境域を獲得することになった（小松1997: 372; 帯谷2003: 79）。

本稿では、現地ムスリム・ジャーナリストの一人、ムッラー・アーリム（生没年不詳）が、こうして形成されたロシア領トルキスタンを空間的対象として著した歴史書『トルキスタン史』（1915年タシュケント刊）を取り上げる。歴史叙述がなされるとき、当然ながらその主たる叙述対象は歴史の実在として前提されるのがならないである。では、著者ムッラー・アーリムはトルキスタンをいかなる意図のもと、いかように歴史の実体としてとらえようとしたのだろうか。またそれは、ほぼ同じ頃に民族史としてのトルキスタン史を構想したジャディード知識人たちの動き（小松2022: 78–86）といかなる関係にあるのか。本稿ではこれらの問題を同時代史料に即して考える。

以下、まずⅠでは、ロシア帝国の行政単位としてのトルキスタンがいかに組織され、それがいかなる環境を生み出したのかを跡づけ、次いでⅡでは、ムッラー・アーリムの人物像、ことにジャーナリストとしての活動とその著作『トルキスタン史』の刊行に考察を加える。最後にⅢでは、『トルキスタン史』の構成と内容を吟味するとともに、そこでトルキスタンがいかに歴史化されているのかを検討する。この作業を通じて、近代における政治秩序と地域概念の相互作用のありように光を当ててみたい。

---

2 一方でバルトリドは『イスラーム百科事典』（第1版）において、ドイツの東洋学者マルクヴァルト（1864–1930）の研究に依拠しながら、7世紀のアルメニア語文献ではアム川がトルキスタンのただなかに立ち現れること、また、トルキスタンがカスピ海東岸のアトレク川以北の地域にも結びつけられていることを指摘している（Barthold 1987: 895）。

## I. 統治空間としてのトルキスタン

19世紀後半、ロシア帝国は中央アジア南部の征服を本格化させ、1865年にコーカンド・ハン国の支配下にあった要衝タシュケントを陥れた。ここに1867年に創設されたトルキスタン総督府は、コーカンド・ハン国、ブハラ・アミール国、ヒヴァ・ハン国と対峙・近接しながら、巨大なムスリム人口をかかえる肥沃なオアシス地域の統治に着手した。その当初の施政権域は比較的狭小であり、サマルカンド(1868年にブハラから割譲)もフェルガナ盆地(1876年に併合)も含んでいなかった。そのような限られた範囲を管轄する行政区にトルキスタンの名称があてられたのは、いかなる理由によるのだろうか。『トルキスタン史』の出現にとって遠景をなすこの命名の経緯について、まずは概観しておこう。

歴史的に、トルキスタンという地理的呼称の用法は一様ではなかった。それはテュルク系諸王朝の政治支配の恒常化、およびその支配域におけるテュルク化——中央ユーラシアの場合、とくにイラン系言語の話者集団において母語がテュルク語に置き換わる現象——の進行に影響されて変化したからである。イスラーム化が中央ユーラシアに波及すると、ペルシア語やこれと相互参照の関係にあったアラビア語におけるトルキスタンの呼称は、マールワラーアンナフルやフェルガナ、ホラズム、あるいはトゥラン(イランの対概念)といった地名と関係づけられ、相関的に使用されるようになる。その用法からみて、トルキスタンはペルシア語の「本土」としてのイランの地(イーラーン・ザミーン)に対して、結果的に接近と侵蝕のベクトルをおよぼすことになるが、それはけっして単線的なプロセスではなかった。16世紀後半以降ヤスの町にトルキスタンの呼称があてられた(野田2007: 21(註59); 木村2008: 50-51)ように、その用法にはときに分岐や変異が起こったからである。イランで生起し運用されていたトルキスタンの用法——アム川以北のオアシス地域を包摂し、トゥランないしマールワラーアンナフルとも互換されうる——がナーディル・シャーの支配(1740-47)を機にブハラに伝播したケース(木村2008: 54-55)もまた、そうした例に数えられるだろう。

概してトルキスタンという呼称は、とくにイランにおいて中央アジアのオアシス地域全体を包摂するような拡張的な使われ方がなされたのに対し、当の中央アジアでこの用法はかならずしも一般化していなかった(小松1997: 367-370)。だとすれば、中央アジア南部に進出したロシア人は、何を根拠にトルキスタンを征服地の呼称として適用したのだろうか。

ここで興味深いのが、インド植民地を足がかりにアフガニスタンやイランと交渉を深めつつあったイギリス人が、トルキスタンのイラン式・アフガン式用法を参照し、これを英語の実用語彙として応用したとみられることである。その最初期の例といえるのが、政治家・外交官エルフィンストン(1779-1859)による以下の記述である。

ペルース山脈の西側およびオクサス川の北側に位置するくにの全域は、トルキスタンと呼ばれる。この用語は、トルコ語が話されていると考える理由があるかぎり、ペルース山脈の東側

にも敷衍されうる。ただし、そちら側の領域について述べる機会がある場合、私はそれを中国領トルキスタンと呼び、もう一方をただトルキスタンと呼ぶことにする。タルタリアという呼称は当地では知られていない。オクサス川とパロパマイソス山脈とのあいだの一角が残るが、これはカーブルに帰属する一地方ではあるものの、その主要な住民がウズベク人であることからトルキスタンとして言及するのが適切である (*Elphinstone: 88-89*)。

エルフィンストンは、ベルート山脈<sup>3</sup>をはじめ、オクサス川（アム川）、タルタリア（Tartary）、パロパマイソス山脈（ヒンドークシュ山脈）といった地理名称を目安として挙げながら、トルコ語（テュルク語）が話される領域の全体ないし一部にトルキスタンの用語をあてるのが適切だとの見方を示している。この記述には、現地民になじみのないタルタリア——13世紀以降、モンゴル帝国およびその継承諸国家の支配下のテュルク系・モンゴル系・ツングース系諸民族の住地をヨーロッパ人が漠然と指して用いた呼称。「タルタル人の地」の意——という用語の使用を避けるべきとの姿勢も暗に示されている。

エルフィンストンの提言は、当時ヨーロッパで進んでいた地域概念の見直しの一環とみることができる<sup>4</sup>。たしかに、ヨーロッパの地理学ではタルタリアのほかにも、ロシア語におけるブハーリア（Bukhariia）という造語——16世紀中葉以降ブハラが政治・経済の中心として意義を高めるにつれ、ロシア人が「ブハラ人の地」の意で使用しはじめ、やがて天山以南パミール以東の地域、つまりタリム盆地一帯（「小ブハーリア」と呼称）にも錯誤的に敷衍された——が、19世紀に至るまで、現地民の地理認識や用語法とは無関係に使用されつづけていた。バルトリドは、それがトルキスタンに置き換えられたことについて、「科学的地理学は、「トルキスタン」が「大ブハーリア」（この用語はセンコフスキー<sup>5</sup>の著作でもまだ用いられていた）の呼称に取って代わったことを、ロシア人ではなくイギリス人に負っているのである」（Bartol'd 1977: 518）と的確に論評している。では、征服地にトルキスタンの名を与えるに際して、ロシア人はイギリス人の用法をそのまま借用したのだろうか。事柄はそう単純ではない。

19世紀前半にロシア語の書籍には「中央アジア」（Sredniaia Aziia）の語が徐々に現れ、それはしばしばブハラ、ヒヴァ、コーカンドのウズベク諸政権の支配領域を総称的に指したが、これに比するとトルキスタンのそのような用例は、きわめて少なかったといえる。たとえば、労作『ブハラ・ハン国記』（1843年刊）でその名声を不動のものとした東洋学者ハニコフ（1819-78）の記述にも、それはあてはまる。彼は同書のなかで、中央アジアに何度か言及するほか、ブハラ・ハン国（ロシ

3 エルフィンストンは、ベルート山脈をパミール高原の南縁の一角にして東西の分水界をなすものとみなしている。このあたりの彼の地理認識については、ヘディン（1979: 182-186）の解説も参考になる。

4 19世紀前半以降の中央アジア概念の普及は、まさにこの動きと連動するものであった。それについては別稿で論じる予定である。

5 ロシアの東洋学者（1800-59）。とくに史料学の分野ですぐれた業績を残した（「大ブハーリア（Grande Bukharie）」の語が著作の標題にも現れる一例として：*Senkowski*）。

ア帝国期にはブハラ・アミール国をこう呼んだ)の領土と関連するかぎりにおいてブハーリアの語にもときに言及するが、トルキスタンをこれと同様の意味で用いたり、ブハーリアの代用として言及したりする姿勢はみられない。ちなみに、彼は同書の本文を次のように書き起こしている。

中央アジアの諸領土を記述することになった人々のほとんどは、文教化された社会を記述するさいに許されるような精密さをともなわせることはおろか、平方面積の数値に関するいくらかの知識を概略的に提供することにおいてすら、それら諸領土の境界の特定が困難であることを訴えてきた。残念ながらわれわれは、ここでもおなじ訴えを繰り返さねばならない。というのも、ブハラ・ハン国は近隣諸国と同様に、国土の恒久性もしくは条約文書にもとづいた境界をもたず、それらは支配者たちの弱さの程度如何にしたがって拡張もすれば縮小もするからである (Khanykov: 1)。

ハニコフはここで、中央アジア諸政権が明瞭かつ恒久的な領土的境界をもってこなかったことを指摘しているが、いみじくもこの地域にそれを導入したのがロシア帝国であった。

19世紀前半、カザフ草原の併合を進めるロシアは、その南に広がるオアシス地域をいかに認識したのだろうか。その認識の傾向は、いくつかの地図史料 (Terskii 2008: 392–393, 394–395, 422–423, 409) から読みとることができる。とくにトルキスタンの記載に注目するならば、リョーフシンの地図 (1831年作製)<sup>6</sup>のように例外はあるものの、多くの地図において、トルキスタンはもっぱら都市としてのそれを指していることを指摘できる。これは端的に言えば、野田 (2007) の論考からも了解できるように、草原のカザフ遊牧民のあいだで共有されていた、ヤサヴィー廟の所在する都市をこそトルキスタンとみなす地理認識、いわばトルキスタンのカザフ式用法にならったものといえる。

1847年にシル川河口のライム要塞に足場を得たロシア軍は、同下流域を遡上するかたちで徐々に要塞を建設していくが、この方面の地理情報に乏しく、偵察と測量を重ねつつの前線拡大であった。それでも西からシルダリア要塞線、東からシベリア要塞線を延伸させるロシア軍は、草原とオアシスの境域に広がるコーカンド・ハン国の領土を次々と侵し、同国に対する前線地域として「新コーカンド線 (Novo-Kokanskaia liniia)」を形成するに至る (Morrison 2021: 220–221)。露暦1864年7月18日の勅令で、当該地域に展開する全軍の指揮権を委ねられたのが、アウリエータ占領の功に

6 リョーフシンの地図 (Terskii 2008: 422–423) には、トルキスタン (Turkestan) がシル川流域の都市名として明示されるのみならず、ほぼマールワラーアンナフル (アム川とシル川に挟まれた領域) とそのごく近辺を指し示す地域名としても記されている。これは西欧における最新の東洋学の研究成果にも通じていたリョーフシンが、西欧で受容されはじめていたトルキスタンの新たな地理学的用法を参照したことによると考えてよいだろう。なお、後者のトルキスタンが大ぶりの太字で示されているすぐそばにはブハーリア (Bukhariia) も同様の字体で書き込まれているが、これは当時、両者が類義の地理名称として互換的に使用されていたことを示唆するものと理解できる。

より少将に昇進したばかりのチェルニャエフ（1828–98）であった（*Romanovskii*: 146）。その直前には、シル川中流域右岸の要地トルキスタンもロシア軍の占領下に入っていた。すなわち新コーカンド線は、同年6月にロシア軍が東でアウリエアタ、西でトルキスタンを相次いでコーカンド軍から奪取した結果創出された、チュー川流域からシル河畔（ヤニ・クルガン要塞）までを包摂するロシア軍の新たな実効支配圏にほかならなかった。

まもなくこの新コーカンド線は、陸軍大臣ミリューチン（任1861–81）の命令（露暦1865年2月12日付）により、オレンブルグ総督府管轄下のトルキスタン州（*Turkestskaia oblast'*）へと再編され、チェルニャエフがその軍務知事に任命された（*Romanovskii*: 154; *Terent'ev-I*: 298）。その後、彼によるタシュケント占領（1865年6月）を経て、1867年にトルキスタン州は、シルダリア州（中心はタシュケント）とセミレチエ州（中心はヴェールヌイ）とからなる新設のトルキスタン総督府（*Turkestsanskoe general-gubernatorstvo*）の管轄下に移管・再編され、これと連動してトルキスタン軍管区も創設された（その初代総督兼総司令官はカウフマン（任1867–82））。このようにロシア帝国の中央アジアにおける軍事征服のプロセスのなかで、トルキスタンの名を冠し明瞭な境界をもつ地域が、新来の支配者ロシア人の統治空間として立ち現れたのである。

このトルキスタンという新たな行政上の地域は、地理的な位置関係からしても、また以上にみた征服の経緯からしても、都市としてのトルキスタンがその名称の直接の由来になっていることは明らかである。換言すれば、ここでのトルキスタンはカザフ式用法を援用するものであった。このように、ロシア人は中央アジア南部のオアシス地域を支配するにあたり、都市トルキスタンを基点・目印としつつ、一定の広がりをもつその周辺地域にも同呼称を敷衍して適用し<sup>7</sup>、帝国の最高レベルの意思決定機関も関与しながらこれを公称化したといえる。いうまでもなく、この用法は民族誌的・言語的環境にも留意しながらエルフィンストンが援用したとみられるイラン式・アフガン式用法とは基準や視点を異にしている。このときロシア人の採用した用法がアム川ないしヒンドゥークシュ山脈を境とするような南側からの視点を欠いていることは、たとえば、『キルギズ草原地図（*Karta Kirgizskoi stepi*）』（1866年作製）に示されたトルキスタン州の範囲をみれば一目瞭然である。ここでのトルキスタンはロシア帝国の施政権下にあるシル川右岸の都市、ならびに、おおむねシル川の北側に広がる、したがってアム川からは遠く隔たった一つの州に名称を与えるにすぎない。こうしてみると、ロシア帝国は多分に地政学的観点から現状（すなわち新征服地の置かれた状況とその地勢）をとらえ、これに適合するカザフ式用法を応用しつつ、トルキスタンを政治的・軍事的に領域化したのである。

しかし、いやだからこそ、このトルキスタンの指し示す範囲はその後のロシア軍の軍事行動の展開にしたがって、比較的速いテンポで段階的に拡大した。それは軍人東洋学者コステンコ（1841–91）

7 ただし、トルキスタンのこうした用法はかならずしもロシア人による創案というわけではない。たとえば、トルキスタンが同市を中心に広がるシル川中下流域一帯を指す地域名としても用いられていたことを16世紀の史料から確認できる（木村2008: 50–51）。

による、軍事統計調査記録にもとづく次の記述にもよく表れている。

トルキスタン軍管区は、1867年7月、おもに西シベリアとオレンブルグの境域の統合後まもなく帝国に併合された地域から成立した。そのとき管区の面積は1万4947平方マイル<sup>8</sup>であり、同域には105万9214人の住民がいた。その後、管区は広大さの面でも人口の面でも急速に拡大しはじめた。たとえば、翌1868年、当該管区の領域にブハラ・ハン国のかなりの部分がザラフシャン管区の名のもとに併合された。この併合により400平方マイルの土地と20万人におよぶ住民が加わった。1870年、サマルカンド東方のザラフシャン川上流域に位置するマストチャーフ、ファルガル、ファーラーブ、マギヤーン、コシュトウトといった、クーヒスターンの小規模な独立した諸バク領が併合されたが、これは74平方マイルの土地と3万1468人の住民を擁していた。1871年、1000平方マイルにおよぶ土地と10万人の住民を擁するイリ川上流地方、すなわち、いわゆるクルジャ・スルタン領が征服された。1873年、1700平方マイルにおよぶ土地と10万9585人の住民を擁するアムダリア支区が併合された。1875年に併合されたナマンガン支区は、676平方マイルの土地と12万7216人の住民を擁していた。翌1876年にも諸事情により、644平方マイルの土地と60万2245人の住民を擁する、コーカンド・ハン国の残りの部分をも帝国の構成下に組み込まざるをえなくなった（ナマンガン支区とともにフェルガナ州として編入）。〔中略〕

このように、トルキスタン管区の成立期からほぼ毎年併合がおこなわれ、それにより、総計では、管区成立時の面積の30パーセントに相当する4494平方マイルの土地と117万1514人の住民が加わったのである（*Kostenko-III*: 291-292）。

この記録は1880年に刊行されたものであり、それ以降の清に対するイリ地方返還（1881年）、カスピ海東部のトルクメン地域の征服とザカスピ州<sup>9</sup>創設（1881年）およびそのトルキスタン総督府への移管（1897年）、パミールのうちパンジ川右岸地域のロシア領への事実上の併合（1905年）（宇山2016: 129）といった出来事もまた、行政的トルキスタンの領域的構成に起こった顕著な変化のうちに数えねばならない<sup>10</sup>。

ロシア統治期におけるトルキスタンの領域的拡大の一例を挙げよう。書物の主題におなじ「トルキスタン地方（*Turkestanskii krai*）」を掲げていても、東洋学者パシノ<sup>11</sup>（1836-91）の扱う1866年時

8 ここでのマイル（1マイル＝7.4204キロメートル）は、英語圏のヤード・ポンド法にもとづくそれとは異なる。

9 行政上、当初はカフカースの構成下に帰属していたが、1890年から陸軍省直轄となり、97年にはトルキスタン総督府に移管された（*Nepomnin* 1968: 44-45）。

10 このほか、ザラフシャン管区のサマルカンド州への再編（1887年）、セミレチエ州のステップ総督府への移管（1882年）とトルキスタン総督府への再編入（1899年）なども挙げられる（*Masal'skii* 1913: 343）。

11 1866年にトルキスタン地方を訪れ、その見聞録を残しているが、彼の行動と関心、記述の対象範囲は当時のトルキスタン州（*Turkestanskaia oblast'*）の枠をほとんど出るものではない。

点のトルキスタンと地理学者マサーリスキー（1859–1932）の扱う半世紀近く後のそれとは、おのずと範囲、内容、様相を大きく異にしていた（*Pashino; Masal'skii*）。マサーリスキーは自著『トルキスタン地方』（1913年刊）において、統計データをまじえて執筆当時の現況を次のように説明している。

トルキスタンは173万1090平方露里という広大な面積（広範な内陸水域を除く）を有しており、同地方のうちロシア領の諸州が149万3090平方露里、また、従属するブハラ、ヒヴァの両ハン国は23万8000平方露里を占める。〔中略〕

行政上、トルキスタンを構成するのはセミレチエ、シルダリア、フェルガナ、サマルカンド、ザカスピの5州に分かれるトルキスタン総督府である。ブハラとヒヴァ両ハン国も、おなじくトルキスタン総督府の監督下にある（*Masal'skii*: 343）。

マサーリスキーはさらに、トルキスタン総督府管轄下5州の人口を648万400、ブハラ・ハン国（アミール国）の人口を250万、ヒヴァ・ハン国の人口を55万、すなわちトルキスタン全体の総人口を953万400と見積もっている（*Masal'skii*: 348）。

ロシア統治期のトルキスタンは、ロシア語でロシア領トルキスタン（*Russkii Turkestan*）と呼ばれ、たんにトルキスタン（*Turkestan*）もしくはトルキスタン地方（*Turkestanskii krai*）とも通称された（後者はやがて公称でも使用）。それはまた、広義には直轄領のみならず保護国のブハラ、ヒヴァをもその内に包含するものと解されるようになった。このことは、如上のロシア式用法におけるトルキスタンがエルフィンストンの定義づけの例にみたようなイギリス式用法と近似する地理的範囲を結果的に指し示すようになったことを物語る。この近似あるいは調和が偶然の結果か必然の結果かはさておき、ロシアの中央アジアにおける軍事征服と統治がトルキスタン概念の意義と汎用性を高めたことは疑いをいれない。それは19世紀になってはじまったタルタリア概念やブハーリア概念の実用語彙からの駆逐（ならびにそれらのトルキスタン概念、中央アジア概念への置換）をうながした。また、とくに19世紀第4四半期以降の露清両国家による統治の既成事実化は、ロシア領トルキスタンと中国領トルキスタンの対（セット）の関係を強化し、これにしたがい、西トルキスタンと東トルキスタンという対をなす用語の一般化を支えることにもなるだろう。

このようなトルキスタンの概念・用語としての発展は、とくにそれが公的かつ恒常的に用いられつづけたロシア帝国の統治空間——面積の拡大と人口の増加という物理的成長をともなっていた——においては特別な意味をもったといえる。それは当然、そこに暮らす人間の認識にも作用せずにはおかなかったであろう。この問題については、後段のⅢであらためて考えることにしたい。

## II. ムッラー・アーリムと『トルキスタン史』

### 1. 著者ムッラー・アーリムについて

マサーリスキーの引用する統計データによれば、タシュケント市の人口は1897年時点で15万5673人、1910年1月時点では20万1191人を数えた。また、1897年の統計（ロシア帝国の国勢調査）によって割り出された、シルダリア州（タシュケント市を含む）の民族別人口割合において、在来のテュルク系オアシス定住民たるイスラーム教徒を指すと考えられるサルト人<sup>12</sup>は、9.76パーセントを占めた<sup>13</sup> (*Masal'skii*: 348, 360)。このタシュケント居住のサルト人の1人にあたるのが、『トルキスタン史』の著者、ムッラー・アーリムであった。

ムッラー・アーリムの経歴は、かならずしもつまびらかではない。筆者がこれまで調査したかぎり、彼の生没年は不詳であり、とくにその前半生に相当する部分やロシア帝政最末期以降の活動についてはほとんど情報が無い<sup>14</sup>。彼の履歴は、先行研究 (e.g.: Allworth 1990; Khalid 1998; Abduazizova 2008) の多くがそうするように、彼自身のジャーナリズム活動の対象・舞台となった、当時の定期刊行物をおもな情報源とするよりほかなさそうである<sup>15</sup>。

彼は自著『トルキスタン史』の標題紙における責任表示において、同書の「出版者兼編纂者」の役割を与えられており、『『トルキスタン地方新聞』の編集者ムッラー・アーリム・マフドゥーム・ハージー」と記載される。厳密に言えば、このうち彼の本名はアーリムの部分に限られ、残りの成分はより後発的に付された称号と考えられる。アーリムの直後にくるマフドゥームは、「社会的地

12 ロシア統治期のトルキスタンにおけるサルト人 (Sart) という民族名称とこれをめぐる諸問題については、定期刊行物史料を駆使した小松久男による専論 (小松2022) がたいへん参考になる。

13 最多は「キルギズ人 [カザフ人] とカラ・キルギズ人 [クルグズ人]」の64.4パーセントであり、ほかにテュルク人10.73パーセント、カラカルバク人6.31パーセント、ウズベク人4.34パーセント、ロシア人3.04パーセント、タジク人0.4パーセントなどが計上されている。

14 ウズベキスタンの研究者シャードマーノヴァは、情報源を示すことなく、ムッラー・アーリムの経歴を以下のように記している。「ムッラー・アーリム・アブドゥルカースイモフ [sic] はマドラサを修了し、何年か郡のカーズィーを務め、のちにはタシュケントのモスクの一つにおいてイマームとなった。1870年より『トルキスタン地方新聞』の編集部に勤務しはじめた。1875年にアンディジャン郷の郷長となった。1880年からふたたび同紙の執筆者となった」(Shadmanova 2011: 193 (prim. 2))。シャードマーノヴァのこの記述（とくに後半部分）は、『トルキスタン地方新聞』に連載された無署名論説「ハン国時代のカーズィーについて」(*Gazēt-1905.9.10; Gazēt-1905.9.17*) を一つの典拠にし、その著者をムッラー・アーリムに比定しているとみられるが、同論説全体の内容から判断して、その著者がムッラー・アーリムとは別人であることは確実である。このことから、シャードマーノヴァの提示する情報を鵜呑みにすることはできない。ムッラー・アーリムがほんとうにカーズィーを務めたのかどうかも疑わしい。

15 彼が編集者を務めた『トルキスタン地方新聞』については、簡易なテーマ別記事便覧（著者名索引付き）(*Fayzullayev* 2008) がウズベキスタンで出版されており、ムッラー・アーリムの執筆した記事もかなりの数がありリストアップされている。ただしこの便覧には、同紙に掲載されたすべての記事が網羅的に示されているわけではなく、索引も不完全である。

位の高い聖職者の息子」(Bertel's 1954: 219)、「男性であるところの、聖職者およびその親族に対する敬称」(Borovkov 1959: 254)といった辞書的意味が与えられるように、彼の父親か他の近い男性親族、あるいは彼自身が「聖職者」すなわち宗教的な教養を身につけた学者(ウラマー)ないし宗務者であったことに由来するはずの敬称(本名に後置される)である。1つの可能性としては、次に述べるムッラーとも呼応して彼の名前の一部を構成するようになったのかもしれない。

ムッラーは、マドラサでイスラーム諸学を修めた学者に対する敬称であり、本名に接頭するかたちで人名の冒頭部分を構成することが多い。したがって、彼はマドラサの修了者と推測される。彼は『トルキスタン史』や『トルキスタン地方新聞』においてクルアーンやハディースの一節をしばしば引用したり、イスラームの教義に関する見解を積極的に開陳したりもしており<sup>16</sup>、この推測は補強される。彼はときに新聞紙上でダームムッラーと呼ばれることもあったが、同語は一説にはムッラーの強調形(定かではないが、「ダー」は漢語の「大」に由来するとの説もある)とされ、辞書的にはムスリムの「宗教学校の教師」や「その学識で名高い人物に対する尊称」(Bertel's 1954: 134; Borovkov 1959: 131)といった意味が与えられる。これも本名に接頭し、「先生」のような意味で用いられる傾向がある。

ところで、彼は『トルキスタン地方新聞』紙上で、サマルカンドのジャディード知識人、ベフブーディー(1874-1919)がマクタブの就学児童用にテュルク語で著した『一般地理学提要(*Muhtaşar-i jugrāfiyā-yi 'umūmī*)』という教科書の見本刷りを論評し、アラビア語の語彙を凝らした技巧のかつ装飾的な文章表現の多用を批判し、平明なテュルク語で(*sādda türk tilidä*)記述すること、さらには、新聞への投稿記事も一般のテュルク語読者層にわかりやすくテュルク語口語体(*türk alfāzları*)で執筆することを提言している(*'Ālim-1906.03.15*: 4-5)。これに応じてベフブーディーは、「ダームムッラー・ムハンマド・アーリム氏」とうやうやしく呼びかけて謝意を表し、その提案を受け入れ、可能な限りこれを実践していく旨を述べている(*Behbūdi-1906.4.12*: 5-6)。

こうしたことから、彼は学問的背景と学識、教育・文化活動への造詣を社会的に認められる人物であったことがわかる。中央アジアのムスリム社会では、ムッラーもマフドゥームも本名と緊密に結びつけられ、ゆえに本名に準じるものとして、あるいはほとんど本名の一部と化して使用される傾向の強い敬称だったといえるが、彼の場合においてもしかりであった。また、こうした敬称の成分をとまなう拡張的な名前をみずから名乗ることも、けっしてめずらしくはなかった。彼は新聞紙上の署名入り記事で、通例みずからをムッラー・アーリム、あるいはムッラー・アーリム・マフドゥームと名乗っていた。

16 彼はトルキスタンにおけるイスラーム法の施行状況にもジャーナリストとして関心を寄せていた。たとえば1906年、彼は『トルキスタン地方新聞』紙上で、カーズィー(判事)による裁判や公証、あるいは法要への立ち会いを受けるために臣民が度重なる遠路の往来や歓待などで多大の負担をしいられている状況を社会問題として取り上げ、その解決策として当局に郷におけるカーズィーの増員を提言している(*'Ālim-1906.02.28*: 5-6)。

上にみた彼の名前を構成するもう一つの成分であるハージー（アラビア語「ハーッジュ（*hājī*）」のペルシア語化と転訛を経た語形）は、いうまでもなくマッカ巡礼（大巡礼（*hajj*））の達成者に対する敬称である。これは人名の冒頭に置かれる場合もあれば、本名に後置される場合もある。じっさい彼は1909年から翌年にかけてマッカ巡礼をおこなっており、巡礼途次の各地での見聞を、電文を介して『トルキスタン地方新聞』紙上に逐一詳報している。この巡礼を機に、彼はハージーと呼ばれるようになった。五行（五柱）の1つである大巡礼の実践からは、イスラームの教義の遵守を志向する信徒としての横顔もうかがうことができるだろう。

彼は1904年12月にトルキスタン総督府の官報『トルキスタン地方新聞』の編集者としての功労を表彰<sup>17</sup>され、総督から賞状を授与されているが、そのことを報じた同紙の記事では「サルト人、ムッラー・アブルカースィムの息子ムッラー・ムハンマド・アーリム（*sart Mullā Muḥammad ‘Ālim Abū al-Qāsim oḡlī*）」として言及されている（*Gazēt-1904.12.11*: 3）。ここからは、彼の正式の本名はムハンマド・アーリムであったこと、また、彼の父親の本名はアブルカースィムであり、父親もおなじくムッラー（これが彼のマフドゥームという名の由来だった可能性もある）であったことも確認できる。そしてまた、彼はサルト人という民族的な分類を与えられてもいる。これはロシア当局の当時の公的な民族分類——かならずしも行政手続きとして制度化・体系化されたものでないにせよ——にしたがえば、彼がサルト人との認知を受けていたことを示す。その言論活動から、彼がことさらにサルトを自称したとはいえないが、少なくともそれを否定したり拒絶したりした形跡はない。おそらく彼自身は、さして抵抗なく自分をサルト人の1人に数えていたのかもしれない。

ロシア当局が公的に用いたサルトという民族名称<sup>18</sup>をめぐるのは、小松(2022)が詳論するように、1911-14年にロシア・ムスリムとトルキスタンの言論界で論争が巻き起こった。この論争のなかで、サマルカンドのベフブーディーをはじめとするジャディード知識人たちは、歴史と民族意識に重点を置きながらサルトという呼称を批判し、その不当性を主張してサルト擁護論者と対立したが、これに際してムッラー・アーリムは『トルキスタン地方新聞』にコメントを出し、名称をめぐる論争自体の無益さをイスラームの教理に則して説き、それを終結させようとした（小松2022: 64-72）。そこでの彼の議論は以下に示すとおり、クルアーンに依拠していた。

ムッラー・アーリムは、「信徒たちは兄弟にほかならぬ」(Q49:10) という聖句を引きながら、「信

17 彼は1906年7月にもトルキスタン総督から襟に金刺繍のほどこされたカフタンの賞与を受けている（*Abdirashidov* 2011: 160）。

18 ロシア当局はトルキスタンの定住民を早くからサルトと汎称した。ロシア語官報『トルキスタン報知』の付録として1870年に発刊された現地語新聞『トルキスタン地方新聞』の創刊号では、同紙が「サルト語（*sartča*）」で書かれる旨が明記されていた（*Gazēt-1870.4.28*: 1）。そのサルト語とは中央アジア南部定住地域のテュルク語にほかならない。トルキスタンの植民地当局はその後ロシア語とテュルク語（「サルト語」）の両方で「サルト語（*sartskii (/sartovskii) iazyk; sartča / sartiyya zabāni*）」という用語を同様の意味で使用した。逆にいえば、ロシア統治期当初から、サルトはテュルク語を母語とするムスリム定住民の名称として公的に枠——特定の言語と人間集団とを接着させる補助媒体——をほどこされ、それが用語法の既成事実化を支えたといえる。

徒かつムスリムとして兄弟であり仲間である以上、呼び名をサルトとするかウズベクとするかに違いはないはずだ」と述べる。さらに、「人間たちよ、われらは汝らを1人の男と1人の女から創り、種族と部族に分けた。これは汝らを知り合わせるためである。汝らのうちアッラーの御許で最も貴いのは、最も畏れる者である」(Q49:13)という聖句を引き合いにだしたうえで、「サルト、ウズベク、テュルク、タタールといった名称をめぐって争ったり同族一党を誇示したりせず行動すべし」、また、「サルトの名を嫌悪する同宗の兄弟たちが述べたてるこの文句は、彼ら自身に何らの利益もなく、シャリーアに照らして完全に有害である」と説く（*‘Ālim-1913.1.20*: 2）。彼が同宗の論理を用いてあくまで仲裁者としてふるまい、サルトという呼称の是非にあえて立ち入らなかったことは注目に値する。この態度は同呼称の公用をつづけるロシア当局の政策に矛盾せず、「シャリーアに照らして完全に有害」という強めの言い回しで論争の抑止をはかることも体制の威信や秩序の維持には都合がよかった。本心が那邊にあったにせよ、サルト論争における彼の言説が体制に調和的であり、かつどちらかといえばサルト反対論者に対して制止的であったことは否めない。こうしたやや含みのある穏健な中道主義的態度は、次にみるような彼のジャーナリズム活動の経験とも無関係ではあるまい。

ムッラー・アーリムが官報編集者としてとくに目立った役割をはたしたのが、ロシア1905年革命後のタタール人ジャーナリスト、アブデュルレシト・イブラヒム(1857-1944)の言論活動をめぐってであった。彼は、イブラヒムがバクールの日刊新聞『ハヤート (*Hayāt*)』<sup>19</sup>紙上でウファのムスリム宗務協議会のムフティーや他のウラマーを非難した<sup>20</sup>ことに批判的にふれたうえで、同紙61号に掲載された「われらのもの (*Bizā ‘a’id*)」と題するイブラヒムの論説において、「トルキスタン・ムスリムは学問と教育と人間性をすべて奪われている。学問の源泉であるブハラの人々は近年、道徳の腐敗に冒され、人間性から逸脱した。宗教共同体には気概も名誉もまったく残っていない」と述べられていることを『トルキスタン地方新聞』紙上(38号)で大きく報じた（*‘Ālim-1905.9.24*: 4-6）。彼はこの記述を一方的で根拠のない虚言だと批判し、イブラヒムを「きわめて下品かつ不道徳で性悪な人間らしい」と酷評している。また、メルジャニー(1818-89)らの例<sup>21</sup>を挙げながら、「現在も多くノガイ人〔タタール人〕がノガイの地からブハラやトルキスタン地方に到来し、学問を修め、学識を得ていく」ことを指摘し、イスラーム法も従来どおり施行されていると反論する。末尾

19 『トルキスタン地方新聞』のある号では、イブラヒムは『ハヤート』紙の「編集者 (*muḥarrir*)」として言及されている (*Gazēt-1905.10.8*: 4)。イブラヒムは同紙の創刊に深くかかわったことが知られており、みずから同紙に寄稿を重ねていた。『ハヤート』については塩野崎信也(2017: 341)が概要を紹介している。

20 イブラヒム自身、ムスリム宗務協議会にはカーディーとしての勤務経験(1892-94)があり、ムフティーのムハンマディヤール・スルタノフ(任1886-1915)とは以来の浅からぬ因縁があったほか、1905年の半ば、ロシア・ムスリム大会の開催を準備しながらも宗務協議会の反対にあってこれを不許可とされたという、直近の苦い経験が背景としてあった(小松2008: 29-38)。この時期前後のムスリム宗務協議会については、長縄宣博(2017: 42-76)がくわしく論じている。

21 メルジャニーをはじめとするタタール人のブハラへの留学運動については、小松久男の専論(小松1983)がある。

では、「カフカース地方でのムスリムとアルメニア人の集団間の鎮静化せざる暴動と扇動<sup>22</sup>を目のあたりにしながら、『ハヤート』紙の主筆がサルト人とノガイ人のあいだに不和をもたらすイブラヒモフの無益な議論を新聞に掲載する」真意を問うことも忘れていない。

ムッラー・アーリムは、『トルキスタン地方新聞』の翌号(39号)にイブラヒムの筆になる上記論説の原文を『ハヤート』61号から転載し、読者に「沈黙せずに応答を書き、このトルキスタン地方のムスリム新聞局に寄稿するよう」求めた(*Ālim-1905.10.1*: 5-6)。40号に掲載された編集部の無署名記事では、イブラヒムへの批判が繰り返されるとともに、ムスリム宗務協議会ムフティーとカーディーのリザエッディン・ファフレッディン(1859-1936)——ムフティーと宗務協議会への批判を受けて新聞紙上でイブラヒムと応酬——を擁護するコメントも付された(*Gazēt-1905.10.8*: 4)。ムッラー・アーリムの呼びかけに対しては、じっさいにナマンガンから投稿があり、自作の詩をまじえてイブラヒム批判を展開するこの投書は43号に掲載された(*Zākirof-1905.10.31*: 6-7)。同紙上でイブラヒムへの反論はこれで落ち着くことになる<sup>23</sup>。イブラヒムがこの一連の経緯をどう眺め、どう反応したかは定かではない。いずれにせよ、帝政の専制やムスリム宗務協議会の恣意と腐敗に敢然と立ち向かったイブラヒムのような反骨のジャーナリストに対し、ムッラー・アーリムが率先して批判の筆をとったことには、彼と公権力との関係性の反映を垣間みることができよう。

ムッラー・アーリムのこうした政治的な位置取りは、1883年以来『トルキスタン地方新聞』の編集長の任にあったオストロウーモフ<sup>24</sup>(1846-1930)の存在にも多分に影響されていたとみられる。

現地語官報である『トルキスタン地方新聞』の編集部には、ロシア統治に好意的な現地人も勤務し、記事や論説を寄稿していた(帯谷2005: 21)。ムッラー・アーリムもその一員であったが、着任の時期ははっきりしない。この点では同紙の記載こそが最も信頼できる情報源になりうるが、筆者はそのバックナンバーを部分的にしか参照できていないため、ここでは先行研究と他の同時代史料にも依拠しながら、彼と同紙および編集長オストロウーモフとのかかわりを概観しておきたい。

露暦1899年3月15日付の『トルキスタン地方新聞』の報道によると、同月5日にトルキスタン総督の公邸では「考古学団体」の会議が開催された。サマルカンドにおけるティムール朝期の建造物の修復問題などが話し合われたこの会議には、総督府の要人やロシア人学者たちのほか、ムッラー・アーリムも出席していた(*Abduazizova 2000*: 46; *id. 2008*: 103-104)。この「考古学団体」と

22 1905年革命期のザカフカースに起こった、アゼルバイジャン人とアルメニア人のあいだの紛争を指している。タタール人・アルメニア人戦争とも呼ばれる。

23 その後、同年48号の編集部による無署名記事において、奇妙にもイブラヒムは「尊敬すべき(hurmatlik)」という敬称とともに言及されている。それは、彼が『ハヤート』紙77号に寄稿した論説(「われらのもの」への追補)の転載記事とこれへのコメントであり、チェレヴァンスキー(1905-06年にロシア政府が設置した信仰の寛容に関する特別審議会にスンナ派ムスリムに関する報告書を提出した人物)が宗教行政の管轄に関連してカザフ人とのあいだにとりもったやりとりが扱われている(*Gazēt-1905.12.9*: 5)。ここではすでにイブラヒム批判は鳴りを潜めている。

24 オストロウーモフがトルキスタンにおいておこなった教育者・東洋学者としての活動については、帯谷可知(2005)がくわしく論じている。

はトルキスタン考古学愛好者協会 (Turkestanskii kruzhok liubitelei arkheologii) にほかならないが、ムッラー・アーリムはその会員ないし準会員か、さもなくば少なくとも陪席員であった<sup>25</sup>。同協会は1893-94年にタシュケントに滞在したバルトリドの提言を受けて、1895年にオストロウーモフら在地の東洋学者たちが創立したものである (香山1993: 16-17)。オストロウーモフは啓蒙の立場から、学術活動とその成果出版への現地ムスリムの参画を歓迎・待望する姿勢をつとに示していた<sup>26</sup>。遅くともこの時期までに、ムッラー・アーリムはおそらくオストロウーモフの引き立てを得て、そうした学術活動に加わっていたことがうかがえる。

ウズベキスタンで公開された『トルキスタン地方新聞』の書誌索引によれば、同紙にはムッラー・アーリムの自作とみられる詩が早くは1901年4月から掲載されていることを確認できる (Fayzullayev 2008: 80-81)。同索引にしたがえば、彼による詩の投稿は1903年4月にかけて9件ほどにのぼり、なかにはペルシア語 (タジク語) 詩も含まれる。これは彼が詩人としての一面をもっていたこと、ならびにペルシア語の文学的素養を身につけていたことを物語る<sup>27</sup>。彼が『トルキスタン地方新聞』の編集部に加わった経緯と時期は明らかではないが、テュルク語とペルシア語の両方における文筆の才をオストロウーモフに買われてのことであったのは想像に難くない。

ムッラー・アーリムとオストロウーモフの親密な関係は、ロシア1905年革命後に創刊された『進歩 (Taraqqi)』<sup>28</sup> 紙による痛烈な批判がこれを炙り出している。同紙6号の戯評では、『トルキスタン地方新聞』が名指しされ、次のように述べられる。「この新聞の出版者兼主筆は、宣教師として有名なニコライ・オストロウーモフであり、ムッラー・アーリムはといえば、数年来、毎月30ないし35ルーブルと引き換えに自分の名誉を犠牲にしてきた、その編集者である」<sup>29</sup>。戯評はさらに、オストロウーモフが「ムッラー・アーリムをみずからの意向で編集者にした」ことを指摘し、次のようにつづける。

25 1904年にムッラー・アーリムは、102年前のハン国時代に鍛造された銅貨をタシュケントの博物館に寄贈したことを『トルキスタン地方新聞』(Gazēt-1904.12.19: 1) で報じられているが、それはトルキスタン考古学愛好者協会の活動とも無関係ではないだろう。

26 たとえば、サマルカンドの文人ミールザー・バラートの歴史地誌『楽園のごときサマルカンド叙記』(1884年タシュケント刊)に寄せた出版者巻頭言において、オストロウーモフは、「これが先例となり、トルキスタン地方における他のムスリム臣民が自身の郷土史を記すことがわれらには望まれるのである」と述べている (Barāt [Ostroumov]: 5)。『トルキスタン地方新聞』に連載された投稿記事をもとに出版されたこの著作は、先行するペルシア語の地誌・墓廟案内書『サマリーヤ』をテュルク語に翻訳・翻案したものであった (木村2022: 32, 35 (注8))。

27 後述するように、彼は『トルキスタン史』の情報源としていくつかのペルシア語史書を利用し、ペルシア語の散文や韻文のテキストを、本文のところどころにテュルク語訳を付さずに直接引用している。同書の記述には彼の自作のペルシア語詩も織り込まれており、たとえば巻末付近に配されている「別離 (al-vidā')」と題される11対句の詩は、ペルシア語で詠まれたものである (Ālim-1915: 216-217)。

28 『進歩』は1905年10月17日詔書で言論の自由が宣言されたのを受けて、翌年6月14日に創刊された。改革主義の旗色鮮明なこの新聞の創刊日 (グレゴリウス暦で6月27日) は、現代ウズベキスタンでは「出版とマスメディア職務者の日」に制定されている (Qosimov va b. 2004: 209)。

29 この一節はハーリドも引用している (Khalid 1998: 88)。

〔オストロウモフは〕この編集者〔ムッラー・アーリム〕を通じて、そろりそろりとイスラーム信仰に触手を伸ばしはじめた。編集者もいかんせん、編集業をやめておこうなどといえば、毎月得られる金銭を手放すことになる。否応なしに、彼はオストロウモフが口から発したことは何でも新聞に書き、ムスリムのあいだに広めはじめた (*Taraqqi-1906.7.5:2*)。

つまり、ムッラー・アーリムは宣教師オストロウモフの意を体してイスラーム信仰の毀損に加担しているとして、槍玉に挙げられているのである。戯評は結びにおいて、『進歩』紙に対してムッラー・アーリムが自身を編集者にするようにもちかけてきたが、これを同紙がことわったという一件を取り沙汰し、「われわれの編集部に貴殿のような名ばかりの識者<sup>30</sup>は必要ない」と言明している (*Taraqqi-1906.7.5:3*)。これに対してムッラー・アーリムは、『トルキスタン地方新聞』に長めの反論記事を発表している (*‘Ālim-1906.7.9:2-4*)。『進歩』紙はまもなく当局から停刊処分を受けるが、それはオストロウモフとムッラー・アーリムを非難する同紙の一連の記事が一つには原因していることだろう。

このように、ムッラー・アーリムをオストロウモフの代弁者、あるいはロシア当局の手先とみる向きがたしかにあり、この傾向はとくに進歩的な考えをもつタタール人や現地のジャディード知識人のあいだである程度共有されていたようである。たとえば、ジャディード運動にたずさわったアブドゥッラー・アウラーニー (1878–1934) はソ連時代の初期に、「前代のウズベク語定期刊行物の歴史」と題される論説を『トルキスタン』紙に発表し、『トルキスタン地方新聞』が「現地民を卑俗と下劣へと先導した」ことを非難しながら、次のように述べる。

新聞の常任の執筆者として、ムッラー・マフドゥーム・アーリム・カーリーが勤務した。現地民のなかに旧政府に忠実な従僕がいたとすれば、ほかならぬアーリム・カーリーこそまさにその人であった (*Avlānī-1924.6.24:2*)<sup>31</sup>。

30 原文は“‘ālim kišī”。ムッラー・アーリムの名前 (‘Ālim) と掛けてある。

31 『トルキスタン』紙のこの記事の原文において、ムッラー・アーリムの名前は2度言及される。名前の構成要素のうち、彼の本名アーリムにつづく尊称とみられる単語は、1度目は“قزى”、2度目は“قزى”と表記されているようにみえる。同紙ではすでに改良版のアラビア文字正書法が使用されていることから、前者はカーズィー (裁判官)、後者はカーリー (クルアーン読誦者) を意味する語として読める。この違いは、アラビア文字の第2子音の上部に点があるともなくとも認めるか否か、すなわち第2子音を“z” (z) と読むか“r” (r) と読むかによる (このうちの一方が正しく、他方が誤植のはずである)。先に注記したとおり、ムッラー・アーリムに裁判官職の経験があることを指摘する研究 (Shadmanova 2011: 193 (prim. 2)) も存在するが、筆者はその根拠を確認できておらず、むしろその事実性は疑わしいとみている。ここでは本来の第2子音は“z” (r) であるものと判断し、「カーリー」の読みを採用した。なお、アブドゥアズィーゾヴァは「カーズィー」の読みを与えている (Abduazizova 2008: 95)。うがった見方をするならば、これがシャードマーノヴァの記述の根拠になっている可能性も否定できない。

こうしてみると、ムッラー・アーリムとロシア植民地当局との緊密な関係は、どうやら同時代の改革派知識人にとっては周知の事実だったようである。彼が示した権力に従順な姿勢には厳しい眼差しも向けられた。言論・出版の自由が制限つきながら法的に担保された環境下において、彼は自身の活躍の場であるメディア上で露骨な批判に晒されてもいた。

以上のような彼のジャーナリストとしての活動と体制寄りのスタンスは、著書『トルキスタン史』とどのようにかかわってくるのだろうか。次いで、ムッラー・アーリムによる『トルキスタン史』の刊行に検討を加えることにしよう。

## 2. 著書『トルキスタン史』について

1333／1915年、これが『トルキスタン史』の標題紙の中ほどに示された、ヒジュラ暦／露暦の刊行年である。標題紙の最下部には、1915年という紀年が単独でも示されている。

活版印刷で単行本出版された『トルキスタン史』は2部構成をとり、第1部相当部分が第3～168頁、「第2部 (ikkinči jild)」が第169～219頁を占めている。奇妙なことに、第2部の末尾近くに記されるヒジュラ暦による擱筆の年月日は「1334年ラマザン月30日」<sup>32</sup>であり、同文中には「西暦1915年に相当」との添え書きがされるものの (*‘Ālim-1915: 216*)、このヒジュラ暦の日付はグレゴリウス暦に換算すると1916年7月31日にあたる (陳垣1972: 卷20民国5)。よって、西暦年には1年の齟齬が生じることになる。ヒジュラ暦の紀年は文字と数字の両方でたしかに「1334」と示されているが、所与の客観的諸情報からして、『トルキスタン史』の刊行年は1915年に相違なく、このヒジュラ暦の紀年は何かの誤りとみなさねばならない。自身ヒジュラ暦にしたがってマッカ巡礼をはたしたほどの著者がなぜ同暦の紀年を誤ったのか、はなはだ理解に苦しむが、その理由は定かではない。これはもしかすると、ロシア統治下のムスリム住民における時間認識の変容——ヒジュラ暦と露暦の併用（および実用上の需要に占める後者の比重の高まり）にともなう時間感覚の変化——の aspekto を映し出しているかもしれず、その点では興味深い。

本文中のこの記述の直後には、「歴史の完成が聖なるラマザン月の完了に一致したゆえ、時宜にかなうこの別離の書 (*vidā‘-nāma*)<sup>33</sup>が記された」というくだりがある (*‘Ālim-1915: 216*)。ここから整合的な解釈を試みるならば、ヒジュラ暦の日付のうち「ラマザン月30日」(同月の末日に相当)に誤りはないはずであり、したがって本来記されるべきだった正しい擱筆の日付は、ヒジュラ暦1333年ラマザン月30日だったにちがいない。これはグレゴリウス暦1915年8月11日(露暦1915年7月29日)に相当する。

『トルキスタン史』の原文では、「第1部 (*birinči jild*)」という文言は当の第1部ではまったく言及されない。これは同書が当初2部構成を予定していなかったためと考えられる。第168頁で第1

32 この年月日はアラビア語による文字表現で本文中に明記され、紀年は“١٣٣٤” (1334) という数字でも示される。

33 この「別離の書」は、先に注記した「別離」と題されるペルシア語詩のことを指す。

部相当部分の記述が完結し、頁が改められると、第169頁の最上部に装飾図柄付きの枠がもうけられ、そのなかに「トルキスタン史の第2部」という題辞が示される。第2部の本文は次のようにはじまる。

この『トルキスタン史』を記した時節は、1915年6月15日をもってロシアのタシュケント征服から50周年となる「記念祭 (jubiley)」の祝日にあたったがゆえ、50年間にわたっての、ムスリム〔政権〕時代との相違や差異をわずかばかり説述し、歴史の第1部を私は完成させた。寛大者たる神が力と佑けを賜与するならば、第2部を開始せん (‘*Ālim-1915*: 169)。

ここからは、この著作がロシア帝国のタシュケント征服50周年を記念すべきものと位置づけられていることがわかる。著者は第1部の終盤で、「ことに、タシュケント市とその周辺がロシア国家に帰属してから、この1915年6月15日で50年に達した。すなわち「半世紀になった」。歴史上のこの時代はまったく別の時代となりはじめた」と述べてもいる (‘*Ālim-1915*: 164)。

そもそもこの『トルキスタン史』は、ムッラー・アーリム自身が『トルキスタン地方新聞』紙上に発表した多数の論説を編集し、1冊の本にまとめたものであり、元の論説は同紙の「戯評 (Felyetōn)」欄にコラム記事(仮に歴史コラムと呼んでおく)として不定期に連載されていた。『トルキスタン史』の第1部の末尾には、「『トルキスタン現地語新聞』<sup>34</sup>の1908、1909、1910、1914および1915年の諸号から転載された (Perepechatano iz nomerov Turkestanskoi Tuzemnoi gazety za 1908, 1909, 1910, 1914 i 1915 goda)」とのロシア語による注記がある (‘*Ālim-1915*: 168)。筆者はそのすべてに目を通せているわけではないが、書誌索引 (Fayzullayev 2008: 24) のデータを参考に判断すると、少なくとも42回<sup>35</sup>におよぶこの歴史コラムの連載の発端となったのは、露暦1908年12月18日付の同紙第94号に掲載された論説だったようである<sup>36</sup>。

筆者が目撃した1915年刊行の『トルキスタン地方新聞』のバックナンバーによれば、連載の最後となったのは露暦1915年8月6日付第59号掲載の「戯評」(‘*Ālim-1915*.8.6: 2)であり、これは『トルキスタン史』第2部の後半における数頁分の記述に相当する (‘*Ālim-1915*: 209–212)。『トルキスタン史』第2部は第219頁をもって完結することから、同書第212頁途中から第219頁までは書き下ろし(新聞未掲載)の記述が収録されたことになる。上述したように、同書の摺筆の日付は露暦

34 『トルキスタン地方新聞』のロシア語における名称。「現地語」と訳した部分の原語は“tuzemnyi” (「土着の」という形容詞であるが、この語はやや差別的なニュアンスをもつ。

35 書誌索引によれば、ムッラー・アーリムの筆になる当該歴史コラムの連載は43回を数えるが、うち少なくとも1回分(露暦1914年7月6日付第53号掲載とされるもの)については、該当記事が紙面上に見あたらない。よってここでは、その1回分を差し引いて42回と勘定した。

36 索引の該当箇所(364とナンバリングされた項目) (Fayzullayev 2008: 24) における刊行年の表示の一つにはおそらく誤りがあり、1908年と1910年のデータのあいだに位置する「1907年」は、正しくは1909年と表示されるべきはずのものと推測される。

1915年7月31日に相当するから、第59号掲載の「戯評」の原稿は遅くとも7月下旬には書き上げられていた。

ムッラー・アーリムが『トルキスタン地方新聞』に寄稿した「戯評」のうち、露暦1915年6月11日付第44号に掲載されたそれ（‘*Ālim-1915.6.11*: 2-3）は、『トルキスタン史』の第1部と第2部にまたがって転載されている（‘*Ālim-1915*: 162-170）。そこから勘定すると、第1部には少なくとも35件、第2部には8件の歴史コラム記事が転載されたことになる。いくつかの例から確認できることだが、転載に際しては、必要に応じて文章の加除訂正がなされる場合もあった。

このように『トルキスタン史』は、『トルキスタン地方新聞』の編集者ムッラー・アーリムがいわば本務として執筆に取り組んだ歴史コラム記事の集大成であった。コラムの書きはじめが1908年末頃、書きおわりが1915年7月頃であることから、単行本出版までには足かけ6年半あまりの歳月を要した計算になる。いつから単行本化がめざされたのかは不明であるが、それが意識されだしたのは、ロシアのタシュケント征服50周年が近づいてきてからのことだったのかもしれない。1910年末頃からしばらく中断していた連載の再開を告げる「戯評」は、こうはじまる。

きたる1915年6月15日、すなわち今から11ヶ月後、われらのこのタシュケント市がロシア国家に帰属・統合されてから50年になる。つまり半世紀になる。この半世紀間にわれらの都市ではいかなる変化と転換があったのか〔中略〕。これについて状況の許すかぎり、われわれが見たこと、知ったこと、聞いたことを説述するのは益なしとはしないはずだと存じ、本紙読者諸賢のために説述するしだいである（‘*Ālim-1914.7.10*: 2）。

この「戯評」は、露暦1914年7月10日付の『トルキスタン地方新聞』に掲載されたものだが、ここにタシュケントのロシア統治50周年を見据えた歴史コラム単行本化の構想を読みとることもあながち不可能ではあるまい。しかし、この時点における主眼があくまでタシュケントに置かれているらしきことには、いくらか注意しておいてよいだろう。

この点で特筆に値するのは、ちょうど同じ頃、サマルカンドのベフブーディーが「トルキスタン史が必要なり」という論説を啓蒙雑誌『アーイナ』に発表していることである（*Behbūdī-1914.7.12*: 898-900 (*Behbūdī-2018 (I)*: 437-438); 小松2018: 41-42; 小松2022: 81）。彼はそこで「われらトルキスタン人（biz *Türkistānīlār*）」という言葉を用いながら『トルキスタン史（*Türkistān ta'rihi*）』の必要性を説いたが、小松久男の指摘をふまえるならば、この主張は当時の出版メディア（とくに中央アジアに読者層をもつムスリム・ジャーナリズムの定期刊行物）上における、テュルク主義史観の萌芽と展伸という流れのなかに位置取るものだったといえる。これに先立ち、すでに1913年1月にサマルカンドのハージー・ムイーン（1883-1942）が『テュルク・トルキスタン史』の編纂を提案し、1914年6月にはタタール人ジャーナリストのヌーシルヴァーン・ヤウシェフ（1886(?)-1917）が民族史の観点から『トルキスタン史』の必要性を説いていた（小松2022: 79-81）。このようにムッラー・アーリムの着想に先んじて、書物としてのトルキスタン史の構想と議論は、もはやかなりの進展を

みていた。だとするならば、それが彼の歴史コラム単行本化の構想に何らかのヒントを与えることになったとしても不思議はないだろう。この問題には後段で立ち戻ることにしたい。

上に述べたとおり、単行本出版されたムッラー・アーリムの『トルキスタン史』は、出版の比較的近くに2部構成へと姿を変えたと考えられる。摺筆の日付のヒジュラ暦紀年には誤りが看取されること、また、とくに第2部の末尾付近の数頁は出版直前の1ヶ月かそこらのうちに記された可能性が高いことも、ここであらためて指摘しておこう。出版を前にしたいくぶん性急な方針転換には、当然ながら何らかの事情があったはずである。この点にも後段で立ち戻ることにしよう。

さて、ムッラー・アーリムの『トルキスタン史』は、正確な日付は不詳だが、露暦1915年9月上旬に上梓されたとみられる。『トルキスタン地方新聞』の9月10日付69号4面には、タシュケント市内の同紙編集局において販売される書籍のリストが広告として出され、『トルキスタン史』の価格が75コペイカと表示されている（これが広告における初出）。9月17日付71号では、「サルト語によるトルキスタン史 (Istoriia Turkestana na Sar. iaz.)」と題された記事において、ムッラー・アーリム自身が同書の刊行をその趣旨・梗概とともに読者に紹介し、購入の方法や価格を案内している（*Ālim-1915.9.17b: 2*）<sup>37</sup>。この記事の末尾でムッラー・アーリムは、購入希望者に「イスラーフ文庫<sup>38</sup>」への照会も促しているが、これはタシュケントのウラマーの同人誌『イスラーフ』（「改革」の意）の編集局が有する書店を指している。

雑誌『イスラーフ』がじっさいに『トルキスタン史』の販売にかかわっていたことは、同誌17号掲載の新刊紹介記事からも確認できる。やや長くなるが、以下にそれを引用しよう。

長きにわたってわれわれが希求し、念願し、待望してきた『トルキスタン史』が『トルキスタン地方新聞』の編集者であるムッラー・アーリム・マフドゥーム氏のご執筆により、今や2部すなわち219頁の体裁で、〔テュルク語の〕トルキスタン方言で (Türkistān šēvasında)、釘型文字〔活字〕で、上質紙で、中判で、誰もが入手でき、道中でも在宅時でも、会合や会議でも、携行用にも読書用にも参照用にも、たいへん手頃で適当なかたちで発行人によって刊行され、これを希求し、念願する人たちの閲覧に供された。〔中略〕トルキスタンのハン国の衰退には何が理由となったのか、それはロシア人の手にいかにして渡ったのか、ならびに、50年のあいだのトルキスタンとトルキスタン人の農業、商業、文明の状況を知り、理解するために、トルキスタン人にとって母語でこれよりもすぐれた書籍は今まで出版されなかったのである。書籍の重要性、紙の良質さ、文字の明瞭さにかんがみれば、75コペイカの値がつけられている

37 さらに9月20日付72号でも、『トルキスタン史』はアブドゥッラー・カーディリー (1894–1938) の2本の新作、小説『少年愛者 (Javānbāz)』および戯曲『不幸な婿 (Bahtsız küyäv)』とともに、現地語の新刊書として紹介されている (*Gazēt-1915.9.20: 4*)。

38 原文には “Iṣlāḡ kitābhānasi” とあるが、1単語目の語末の子音は誤植である（正しくは “ḡ” でなく “ḥ”）。また、2単語目の名詞は “kitābhāna” ではなく “kutubhāna” が本来の形。すなわち “Iṣlāḡ kutubhānasi” が書店の正式名称。

のは、出版者から郷党への寛典にちがいない。郷党にとって何よりも必要な、すなわち郷土の父祖の過去と往時の状況を映し出す鏡にひとしいこの書籍が、わずか1000部しか印刷・刊行されていないことは、われわれを嘆かしめた。この『トルキスタン史』の希求者は、タシュケント旧市街のイスラーフ文庫に照会されたい (*Al-İslāh-1915.9.15*: 537-538)。

一読して明らかなように、この記事<sup>39</sup>は『トルキスタン史』の書籍としての品質と内容的価値を手放して賞賛<sup>40</sup>するが、ここには販促の意図もいくぶん透けてみえる。また、この最高度の評価は、穏健かつやや体制順応的な立場をとる同誌の性格とも無縁ではなかったはずである。同誌はその意味でも『トルキスタン地方新聞』と近い関係にあったといえる。ちなみに、露暦1915年9月24日付の后者の「新刊書についての反響 (Otzyv o novoi knige)」と題された記事には、上引の『イスラーフ』誌掲載記事の全文が転載されている (*Gazēt-1915.9.24*: 2)。

しかし、「トルキスタン方言で、釘型文字で、上質紙で、中判で、誰もが入手でき、道中でも在宅時でも、会合や会議でも、携行用にも読書用にも参照用にも、たいへん手頃で適当なかたちで」刊行され、「50年のあいだのトルキスタンとトルキスタン人の農業、商業、文明の状況を知り、理解するために、トルキスタン人にとって母語でこれよりもすぐれた書籍は今まで出版されなかった」という評言には、それなりの真実も見いだせるのではないだろうか。『トルキスタン史』はその名のとおり、トルキスタンという空間を対象とするテュルク語による歴史叙述が単行本化された嚆矢にほかならなかった。

この著作がじっさいにどのような読者層を獲得したかはかならずしも定かではないが、1000部という発行部数をもって商業的に出版・頒布<sup>41</sup>されたことの意味は、けっして過小評価できるものではないだろう。売れ行きについてはムッラー・アーリム自身が、露暦1916年2月4日付『トルキスタン地方新聞』10号において次のように述べている。

残念ながら、この『トルキスタン史』は1000部を超えては印刷されなかったようである。印刷所で仕上がりに、出版されて以来、購買者と希望者の多さからその大半が売れ、残部はわずか

39 これは無署名記事であるが、おそらく同誌主幹のアブドゥッラフマーン・サーディオフ (1879-1918) の筆になるものだろう。なお、同誌18号では『トルキスタン地方新聞』掲載の「パーブ教徒の噂について (Po povodu slukhov Bobidakh)」と題されたムッラー・アーリムの論説 (*‘Ālim-1915.9.17a*: 2) (『イスラーフ』誌16号が引用する『ワクト』紙1837号の記事の引用 (タシュケントにおけるパーブ教徒の活動を報道) と、パーブ教に関する歴史記述の紹介) の後半部分が転載されている (*Al-İslāh-1915.10.1*: 571-572)。

40 小松 (2022: 76 (注28)) は『イスラーフ』誌の当該記事にもとづいてこの点を指摘するとともに、既存の史書の焼き直しであったため『トルキスタン史』が研究者に用いられることはなかったというババジャノフの指摘 (Babadzhanov 2010: 42) を注記している。

41 トルキスタン総督府官房付属の印刷所から出版された『トルキスタン史』の刊本のいくつかは、公共の図書館や研究機関などにおいて現存を確認できる。たとえば、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所には、そのうちの5点が収蔵されている (Qosimxonov va b. 2014: 10)。

ばかりとなった (*Ālim-1916.2.4: 2*)。

ここから判断すると、同書の売れ行きは上上だったようである。タシュケントの読書人の需要をある程度満たしていたことがみてとれる。

『トルキスタン史』は、ロシア語官報『トルキスタン報知 (*Turkestanskije vedomosti*)』に掲載された記事においても、注目すべき新刊書としてその内容が大きく取り上げられた (*Andreev-1916a; Andreev-1916b*)<sup>42</sup>。記事の著者 G. V. アンドレーエフ (1889–1939)<sup>43</sup> は、現地語に精通する民族誌学者・ルポライターとして知られた人物である。彼はムッラー・アーリムの依拠する情報源と取材法について、次のように指摘する。

タシュケント人のムッラー・アーリムは、ムスリム式の教養をすばらしく身につけた現地人である。著書『トルキスタン史』のために彼が情報源とした諸資料は、非学術的な諸情報 (*nenauchnyye dannye*) であり、同著者が40年にわたって見聞きしえたことすべての書きつけと、彼の収集になる、数多くの学ある現地の古老たちがいくつかのハンの時代のことを記した諸々の回想録とにはかならない (*Andreev-1916a; [Sbornik-588: 112]*)。

アンドレーエフは同記事の別の箇所でも、「自分の歴史をムッラー・アーリムは40年かけて書いた」<sup>44</sup>と述べており、『トルキスタン史』が彼による長年のジャーナリズム活動の成果だったことをうかがわせる。さらにアンドレーエフは、「ムッラー・アーリムの著作は民族誌学的観点からも興味深い」とし、彼が「サルト人およびムスリムとして」同書に「独自の特徴を与えている」こと、そして、「『トルキスタン史』は現地民によって書かれた初の歴史である」ことも指摘している。

以上のように、『トルキスタン史』は、ロシア領トルキスタンのテュルク語官報における連載記事をもとに単行本化され、とくに官界近辺で好評を博すことになった。それはたしかに「トルキスタンの歴史」の名を冠した、はじめての単行出版物として注目を集めた。それにしても、この著作の題名はなぜ「トルキスタンの歴史」を表意せねばならなかったのか。歴史記述の筆をとったムッラー・アーリムが自著に『トルキスタン史』の名を与えたのはいかなる理由によるのか。その執筆のために参照されたのは、アンドレーエフの言葉によれば「非学術的な諸情報」だったが、それは

42 筆者が『トルキスタン集成』を通じて実見しえたアンドレーエフによる連載記事は2本のみだが、書誌学者 B. V. ルーニン (1906–2001) の与える網羅的な書誌情報によれば、『トルキスタン報知』の後号 (1916年の27号) にさらに続編が掲載されているようである (Lunin 1974: 86)。

43 アンドレーエフはロシア語・現地語学校の教師としても活動したが、その教え子の1人には、のちのウズベキスタン科学アカデミー初代総裁 T. N. カーリーニヤゾフ (1897–1970) もいた。

44 『トルキスタン史』には著者ムッラー・アーリム自身が42年前にある古老から聞き取ったとする情報にもとづく記述 (*Ālim-1915: 125*) がみられるが、アンドレーエフの強調する「40年」という執筆期間は、おそらくこれにもとづく概算値だろう。

具体的にいかなるものだったのか。次節ではこれらについて考えることにしたい。

### Ⅲ. 『トルキスタン史』におけるトルキスタンの歴史化

『トルキスタン史』はムスリムの著述の慣例にならい、『クルアーン』とおなじくバスマラすなわち「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」というアラビア語の定型句ではじまる。神と預言者ムハンマドへの賛辞を述べたのち、著者ムッラー・アーリムは「歴史の学知の優越性」に言及したうえで、同書の趣旨を次のように述べる。

歴史の学知の有益たることについては、すべての党派が意見を一致させている。諸共同体中の諸集団の大部分、いやむしろ世界のすべての人々がこの学知を実践し、先人たちの伝承や物語を伝え、それを自身にとって証拠となすのである。なかんずくテュルク人とウズベク人の諸集団は、過去の氏族や部族を記憶にとどめることにすこぶる奮励努力する。しかるにわれらトルキスタンのサルト人は、歴史にさして重きをおかず、2、3世代前の先祖を、また彼らの時代の話や出来事をまったく知らないのである。それゆえ無知なる小生は無能と非力をみずから認めて告白し、落ち度と不行き届きがあれば読者が容赦の筆によって訂正してこれを改めることを期待し願いつつ、フェルガナとコーカンドのハンたちおよび彼らの境涯について、いくつかの史書や古老たちの言に頼るとともに、小生自身の見聞にもよりながら、平明にして慣用のチャガタイ・テュルク語で原稿をものし、『トルキスタン史 (*Ta'riḥ-i Türkistān*)』と名づけ、出版に着手した。至高なる神がこれを成功せしめ、その完遂を可能ならしめんことを。しかるのち、トルキスタン人の兄弟ともがら (*Türkistānlık barādarlarīmiz*) がフェルガナのハンたちと彼らの時代や出来事について、また、偉大なるロシア国家に帰属してから50年のうちにわれらの境遇と品行がいかに変化し、転換し、発展したのかについて熟慮し、「何とすばらしき変革かな<sup>45</sup>」〔と称賛される〕成果を戒めの眼差しで洞察するならばよからんと。成功は神にこそよる (*‘Ālim-1915: 3-4*)。

こう締めくくられる序文<sup>46</sup>は、出版にあたってあらたに書き下ろされたものである。よって、ここには単なる執筆意図だけでなく、出版動機も織り込まれている。

序文に示される著者ムッラー・アーリムの意図あるいは立場は、次の7点に要約できるだろう。

- (1) 歴史の学知の重要性についてはムスリム共同体で見解が一致しており、これをふまえて歴史叙述を実践すること。
- (2) 地の文の1人称で語られる自己は、トルキスタンのサルト人またはトルキスタン人とまっさき

45 原文では、当該箇所は ( ) でくくられ、アラビア語の感嘆文 “Ni‘ma-l-‘inqilābu” が置かれている。

46 序文の一部については、小松 (2022: 76) も和訳を提示している。

に重なること。

- (3) 記述の第一義の空間的対象範囲は「フェルガナとコーカンドのハンたち」の支配領域であり、時間的対象範囲は彼らおよびロシアの支配時代であること。
- (4) 情報源として、史書、古老の談話、自身の見聞に依拠すること。
- (5) 平明にして慣用のテュルク語（チャガタイ・テュルク語）で記述すること。
- (6) 書名を『トルキスタン史』と名づけること。
- (7) 50年間のロシア統治期に現れた肯定的な変化と成果について説明すること。

それでは、以下でこの7点について考えることにしよう。これらの項目は、本書全体の特徴をとらえるうえでも目安になるはずである。

(1) は、著者みずからが歴史を記すことの合理性や正当性を示す意図を含んでいる。これは (2) ともかかわっている。ムッラー・アーリムは、先祖の記憶を重んじるテュルク人やウズベク人に比してサルト人は歴史への意識が低いことを認めたくえて、ムスリムのあいだで周知となっている歴史の有用性をふまえつつ、いわば果たすべき務めとして歴史叙述にみずから着手することを根拠づけているといえる。

前述のように、その当時までにオレンブルグの『シューラー (*Šūrā*)』やタシュケントの『トルキスタンの声 (*Šadā-yi Türkistān*)』、サマルカンドの『アーイナ (*Āyina*)』といったムスリム・メディアではテュルク民族史が活発に議論され、ハージー・ムイーンのような、「完全なる『テュルク・トルキスタン史』の書 (*bir mukammal «Türk Türkistān ta'rihi» kitābi*)」の編纂を提案する論者も現れてすでに久しかった (*Mu'in-1913.1.1*: 10; 小松2022: 79)。こうした歴史の編纂・叙述に対する要請の高まりという気運は、当然ながらムッラー・アーリムもまたこれを察知していたはずである。ならば、メディアの読者の目を鋭敏に意識したはずの彼は、自身の歴史出版もそのような動向と無関係でないことを示し、これにある意味で参入しようとしていたのではないだろうか。しかし、彼が構想する歴史はテュルク主義史観という立場やテュルク民族史という枠組みに立脚するものではなかった。上にみたテュルク人とウズベク人への言及のされ方も、それを多少なりとも示唆するように思われる。

ムッラー・アーリムは、第一にはジャーナリストであり、かならずしも職業的な歴史家というわけではなかった。序文における彼の自己卑下——慣例的な文筆上の礼儀作法の面も多分にあるが——はその遠回しの表明として読みとれなくもない。彼は「歴史の学知の有益たること」を前提に執筆動機を理由づけているが、職業的歴史家が書く歴史における通例の叙述の作法を想起するならば、彼による序文での理由説明はやや手短に済まされている観がある。これは先にもみたような、出版直前のやや慌ただしい構成の変更などを考慮に入れると、作業上の時間的な問題に起因するのかもしれない。ムッラー・アーリム自身、この序文の記述には物足りなさを感じていたふしがある。

『トルキスタン史』の出版からおよそ2ヶ月半後、『トルキスタン地方新聞』には「歴史の学知の特徴と利点について (*'Ilm-i tavārīḥnin<sup>ḡ</sup> ḥāṣṣiyyatī va manfa'atī ḥuṣūṣīda*)」と題される無署名の論説が

発表された (*Gazēt-1915.11.26*: 1-2)。この論説では、まず歴史の学知の利点 (fā'ida) が3つ挙げられ、また、じつに28名にもおよぶアラブとアジャム (非アラブ) の歴史家の名<sup>47</sup>が挙げられる。これは内容や具体的人名からして、ミール・ハーンド (1498没) のペルシア語史書、『清浄園 (*Ravzat al-ṣafā'*)』の記述 (*Mīrḥ'ānd*: 7-13) を翻訳・縮約・翻案したものにほかならない。ミール・ハーンドは、言わずと知れたティムール朝ヘラートの歴史家で、アリーシール・ナヴァーイー (1441-1501) の知遇と庇護を得たことでも有名である。彼のこの普遍史書はペルシア語文化圏の各地で好評を博し、その現存する手稿本の数は、数ある普遍史書のなかでも群を抜いて多い (大塚2017: 358)。このように『清浄園』は、その後のペルシア語歴史叙述に無視されえぬ影響を及ぼした意義深い著作であり (本田1984: 649)、じっさい、著者ミール・ハーンドが歴史の学知の利点を10個ほど挙げるくだりも、ほうほうで参照・引用されている様子がかがえる<sup>48</sup>。

おなじ論説では、歴史の学知の3つの利点が挙げられたのち、改段落後につづく文章中に次の一節がみえる。

歴史の学知の有益たることについては、すべての党派が意見を一致させている。諸共同体中の諸集団の大部分、いやむしろ世界のすべての人々がこの学知を実践し、父祖たちの伝承や物語を伝え〔後略〕 (*Gazēt-1915.11.26*: 1)。

これは上に引用した『トルキスタン史』の序文の一部とほぼ同一であり<sup>49</sup>、このことからしても、当該論説の著者はムッラー・アーリムとみて間違いない。ミール・ハーンドの権威ある古典的史書によりながら歴史の学知の利点を強調するこの論説は、一見すると、唐突に『トルキスタン地方新聞』紙上に現れたようにみえる。しかし、見方を変えるならば、ムッラー・アーリムがこの論説をもって、いわば後付けで自身の歴史出版の意義を補強しようと企図したとはいえないだろうか。すでに世に出た書籍の内容を変更できないのは当然だが、新聞編集者ムッラー・アーリムは、紙面を利用して (それとなく) ある種の情報補填を試みることはできたはずであり、この論説はそれを示唆しているように思われる。

さて、ムッラー・アーリムがサルト論争のさなかにあつて、サルト人の呼称の是非にあえて立ち

47 ここではたとえば、イブン・イスハーク (704頃-67)、タバリー (839-923)、イブン・ムカッファア (721頃-57頃)、ミスカワイフ (936-1030)、バナーカティー (1330/1没)、サアーリビー (961-1038)、ヤーフィイー (1298-1367)、フィルダウスイー (934)、アブルファズル・バイハキー (995-1077)、カーシャーニー (カーシー) (1323/4以降没)、ジュヴァイニー (1226-83)、ムスタウフィー (1281-1344頃)、バイダーウィー (1316/7没)、ラシードウッディーン (1249/50-1318)、ハーフィズ・アブルー (1430没) らの名が挙げられている。

48 『清浄園』における歴史の利点に関するくだりは、たとえば、クルド人の歴史家シャラフ・ハーン・ビドリースイー (1543生) の著作『シャラフの書』でも引用ないし依拠されている (*Bidlīsī-1*: 5-6; *Bidlīsī-2*: 4-5)。

49 ごく微細な相違もあるが、それは「先人たち (*gumāštāgānlar*)」が「父祖たち (*salafīlar*)」に置き換わっている程度のものにすぎない。

入らず、「信徒かつムスリムとして兄弟であり仲間である以上、呼び名をサルトとするかウズベクとするかに違いはないはずだ」(*Ālim-1913.1.20: 2*)と言明したことはすでに述べた。言い換えれば、彼はサルトという呼称を否定せず、その使用を容認する態度をとったのである。そして、彼が『トルキスタン史』序文で示す(2)の立場は、まさにこれと軌を一にする。彼はロシア統治下で生まれた民族名称の慣行を追認し、自身の属する集団・共同体を1人称で指し示すとき、「われらトルキスタンのサルト人」という表現をいとわなかった。サルト人を自己アイデンティティとして受け入れ、それを著者として歴史叙述にも反映させているのである。この点では、テュルク主義史観の主流とは、明らかに立場を異にしていた。

しかし、(5)とのかかわりでいえば、テュルク語で叙述をおこなう点、そして、「平明にして慣用のチャガタイ・テュルク語」という言い回しに反映される啓蒙的・合理的観点においては、ムッラー・アーリムとテュルク主義史観の論者たちとのあいだにそれほど大きな違いはなかったといえよう。ロシア統治期に加速したテュルク化のプロセスは、テュルク語の実用性・汎用性をさらに高めていた。それはトルキスタン総督府の管轄地域において、「サルト語」の名でテュルク語が事実上の公的地位を与えられたこととも関係する。こうした客観的な状況をふまえ、彼がみずからの母語でもあるテュルク語で歴史叙述をおこなったのは、理の当然であったともいえる。

もっとも地域によっては、住民のなかにペルシア語母語使用者が少なからずいたから、ムスリム・ジャーナリズムはそうした言語状況にも配慮しないわけにはいかなかった。たとえば、『アーイナ』や『イスラーフ』などのように、テュルク語のみならずペルシア語でも寄稿を受け入れる編集方針を誌面に明示するメディアもあった。『トルキスタン地方新聞』にしても、散文による本文はほぼ完全にテュルク語で構成されたが、時折、ペルシア語の文——とくに韻文によるそれ——がそのまま翻訳を付さないまま掲載されるケースがみられた。ムッラー・アーリムもペルシア語詩を同紙上に発表していたことは先に注記したとおりだが、彼は『トルキスタン史』においてもペルシア語の文をテュルク語の文と共存させることをまったくいとわなかった。同書第2部の末尾付近に「別離」と題される11対句のペルシア語詩を織り込んでいる(*Ālim-1915: 216-217*)ほか、(4)とのかかわりでいえば、歴史書等の先行する文献からペルシア語の散文や韻文のテキストを翻訳なしでたびたび——場合によっては特段のことわりなく——引用している(*Ālim-1915: 11-12, 15-16, 19, 20, 23-25, 29, 31, 51-54, 58-59, 68, 81-82, 95-96, 98-99, 102-103, 105, 107-110, 112, 116-117, 129, 147, 167, 171, 173, 176-177, 182-184, 190, 206, 210, 215*)。ムッラー・アーリムは読者層の都合や便宜に自覚的だったはずだが、その彼が歴史叙述において既存のペルシア語テキストをやや大胆にそのまま活用していることは、当時のロシア統治下における言語環境、少なくとも『トルキスタン史』の想定上の読者層における言語状況——識字者層におけるテュルク語・ペルシア語のバイリンガリズムの度合い——にもある程度適合すると考えてよいのではないか。ムッラー・アーリムによるペルシア語テキストの利用もまた、彼の歴史叙述の合理主義・実用主義的な側面を反映しているといえる。

(6)と関係性から(3)について考えるならば、ムッラー・アーリムが著作冒頭の序文におい

て直截に「トルキスタン」を空間的な記述対象とすることを宣言していないのは、やや奇異に映る。これはどのように説明できるのだろうか。

『トルキスタン史』の第2部冒頭付近には、次の一節がある。なお、これは露暦1915年6月28日付『トルキスタン地方新聞』49号に掲載された「戯評」(‘*Ālim-1915.6.28*: 2-3)の最初の段落とまったく同一の文章である。

われわれはトルキスタン史と述べた (Ta’rīḥ-i Türkistān dedük)。フェルガナのハンたちの顛末を説述した。ブハラとヒヴァの国々もトルキスタンと隣接するがために、それらについても後代すなわちこの当世に統治をおこなっているハンとアミール両殿下の父祖がいつ、いかなる時代から統治をしてきたのかを、能力の許すかぎりトルキスタン史のために説述しよう (‘*Ālim-1915*: 171)。

原文ではトルキスタン史 (Ta’rīḥ-i Türkistān) の部分は、括弧でくくるなどの強調はなされていない。この記載の初出は1915年6月28日付の記事であるから、これが書かれたときにはすでに『トルキスタン史』の出版の準備段階に入っていたことは間違いなく、この「トルキスタン史」が近く世に出るべき出版書を指すこともたしかであろう。しかし、「われわれはトルキスタン史と述べた」<sup>50</sup>のが、じっさいにいつの時点、いかなる文脈においてのことを指すのかは判然としない。

いずれにせよここで特記すべきは、「ブハラとヒヴァの国々もトルキスタンと隣接するがために」、これら両国の歴史も『トルキスタン史』の記述に組み込むことが宣言されていることである<sup>51</sup>。これは本稿で前述した、「トルキスタン」という地域概念のロシア式用法との関連において理解することができる。この場合、広義のトルキスタンはロシア帝国の保護国であるブハラ・アミール国やヒヴァ・ハン国をも空間的に包摂しえた。ムッラー・アーリムはトルキスタンの中核ないし基部をコーカンド・ハン国の旧領としてとらえながらも、これにロシアのそれ以外の新規征服地・直轄地ならびにブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の現領土を加え、これら全体をトルキスタンと再定義したのである。

ムッラー・アーリムのこの空間認識の根本には、彼自身がタシュケント——1809年にコーカンドのアーリム・ハン(位1798頃-1810)が征服——に出身し、その生涯の最初期にコーカンド・ハン国の統治を直接経験した事実があることは疑いない。タシュケントにおいては1865年6月を境に君主がコーカンド・ハンからロシア皇帝に切り替わり、国家・地域の行政区分もタシュケントの行政的地位も劇的に変化した。そこには当初ある種の錯綜があったはずだが、50年という比較的

50 これは“Ketdik”(行くことにしよう)のように、動詞過去形を用いることで、直近の未来に完結される動作を表現する言い回しである可能性もある。その場合、「われわれはトルキスタン史と述べることにしよう」、あるいは、「われわれはトルキスタン史と呼ぶことにしよう」といった訳にもなりうる。

51 このことについては旧稿でも指摘した(木村2008: 71(注62))。

長いロシア統治の既成事実は、その枠組みにおいて定まり常態化していく支配国ロシアの統治領域と行政区分を住民の認識にも埋め込み、内面化させる作用をもったといえるだろう。それについてもムッラー・アーリムがコーカンド・ハン国の旧領にことさら記述の重きを置いたことは、一国の宗主権が住民の空間認識や歴史認識におよぼす影響のほどを物語っている。

一方で彼は、いふなれば、みずからの記述の対象範囲を最適化しようと試みてもいる。トルキスタンとブハラ・アミール国（別称ブハラ・ハン国）、ヒヴァ・ハン国との空間領域上の関係性について、ムッラー・アーリムは次のようにも述べる。

ブハラ・ハン国は中央アジア (Orta Āziya) におけるイスラーム君主〔国〕の一つであり、トルキスタンにおいてわずかな独立を保ってきた (Türkistända bir az istiqällarını saqlab kelgän) 二つのハン国の一つである。もう一つはヒヴァ・ハン国である (‘Ālim-1915: 203)。

ここからは、ブハラ、ヒヴァ両国が空間的にトルキスタンの構成下に位置づけられていることを確認できる。著作の終盤であらためてトルキスタンの領域的枠組みが示されていることには、注意を喚起しておきたい。なお、「中央アジア (Orta Āziya)」とは、いうまでもなくロシア語における “Sredniaia Aziia” という地域概念の訳語にほかならない。ムッラー・アーリムの空間認識は、当時のロシア語における実用概念とその用語法も参照・借用しながら形づくられていたといえそうである。

こうしてみると、ムッラー・アーリムは執筆のかなり遅い段階でトルキスタンという用語とそれが指し示す領域との整合性をつけようとしていたことがわかる。それは、『トルキスタン史』の名を冠するにふさわしい対象を扱っていることを証拠づける必要に迫られてのことだったのだろう。逆にいえばこのことは、自身の設定した記述対象の実体にならずしも適合しない「トルキスタン史」なるキーテーマを彼が後発的に持ちだし、それゆえにこそ体裁とバランスを保とうと躍起になったことを示唆している。おそらく彼は、「トルキスタン史」の必要性を先行して提唱していたテュルク主義史観論者たちの議論に触発されつつ、むしろ彼らに先んじてそれを単行本出版のカタチで実現させようとし、じっさいにこれをなしおさせたのではないか。だとすれば、『トルキスタン史』という著書のネーミングは、彼が時流に乗った歴史叙述をめざした一つの帰結でもあっただろう。ロシアのタシュケント征服50周年という節目との兼ね合いもさることながら、トルキスタン史の模索・探求の流れに彼が相乗りしたという側面も看過してはならないように思われるのである。

(4) について、ムッラー・アーリムは『トルキスタン史』の情報源として、たしかにいくつかの歴史書と古老からの聞き取り、そしてみずからの見聞を利用している。同書には目次による構成は示されておらず、本文中に見出しがもうけられている箇所がわずかにあるのみである。よってここでは、テーマ（記述対象）と情報源の対応関係を把握するための便宜上、筆者独自の判断によりながら仮の目次を頁数とともに示しておこう。なお、章の番号も題目も筆者が仮に付したものである。

扉 (1頁)

第1部

序文 (3-4頁)

第1章 コーカンド・ハン国の歴史 (4-159頁)

第2章 ロシアによるトルキスタン全域の征服・統治 (159-168頁)

第2部

第2部序言 (169頁)

第3章 コーカンド・ハン国の官位 (169-170頁)

第4章 ブハラ・アミール国の歴史<sup>52</sup> (171-204頁)第5章 ヒヴァ・ハン国の歴史<sup>53</sup> (204-214頁)

跋文 (215-219頁)

『トルキスタン史』は内容的におおむねこのような構成をとる。このうち、第1章、第4章、第5章ではそれぞれ、具体的な出来事の記述において特定の著作が重要な情報源となっていることをみてとれる。第1章ではかなりの部分が、コーカンドの歴史家ムッラー・ニヤーズ・ムハンマドのペルシア語年代記『シャルフ朝史 (*Ta'riḥ-i Šahrūḥī*)』 (*Niyāz Muḥammad-1885*) の記述に依拠しており、ペルシア語テキストの直接引用もしばしばなされている。『シャルフ朝史』はいくつかの箇所を出典として言及される。第4章と第5章ではタタール人ウラマー、メルジャニーのタタール語による歴史書・回想録『カザンとブルガルとに関する情報の集成 (*Mustafād al-aḥbār fī aḥvāl Qazan va Bulgar*)』 (*Marjānī-1885/1900*) の記述 (とくに1885年刊の第1巻) が、出典としては明示されないものの典拠となっていることは間違いない。また、第5章の一部はガージャール朝の歴史家・外交官、レザーゴリー・ハーンのペルシア語による報告記・歴史書『ホラズム使節記 (*Sifārat-nāma-i Ḥ'ārazm*)』 (*Riḏā-qulī-ḥān-1876/1879*) の記述 (1876年刊のペルシア語テキスト) が典拠となっており、これは出典として言及されている。これら3つの著作はいずれも19世紀に公刊されており、ムッラー・アーリムはそれらの刊本を直接利用したはずである。彼がカザンやパリで出版されたこれらの刊本を利用できたのは、もしかするとオストロウモフの計らいによっていたのかもしれない。

52 この章の途中には、「ブハラの歴史的状況 (*Buḥārānīn<sup>8</sup> aḥvāl-i ta'riḥiyyasi*)」という見出しが立てられている箇所がある (*Ālim-1915*: 201)。これは元の『トルキスタン地方新聞』掲載の「戯評」記事 (*Ālim-1915.7.23*: 2-3) がブハラ・アミール国の歴史とヒヴァ・ハン国の歴史の両方にまたがって書かれたことにもない、内容を区別する便宜上、記事内に二つの見出しが設けられたことに起因する。同記事の本文は「ブハラの歴史的状況」という見出しのもとにはじまり、その記述が済むと、「ウルゲンチのコングラト朝国家 (*Ü[r]gānč davlat-i Qonguratiyyalari*)」という見出しが立てられ、ヒヴァ・ハン国の歴史の記述へと移っている (*Ālim-1915.7.23*: 2)。

53 原文では「ウルゲンチのコングラト朝国家 (*Ü[r]gānč davlat-i Qonguratiyyalari*)」という見出しが立てられている (*Ālim-1915*: 204)。これは前注に記した事情による。

ムッラー・アーリムは他の著作の刊本も利用した可能性があるが、これについては今後の調査に委ねたい。

このほか、第1章と第2章には伝聞や古老からの聞き取りにもとづく情報もところどころに挿入される。それはたとえば、「～は人々のあいだで有名である」、「ウズベク人たちの言い伝えによれば～」、「何人かのウズベク人の言によれば～」といった具合に記されている（*‘Ālim-1915: 7-8*）。また、著者ムッラー・アーリムは、84歳のタシュケントの古老がコーカンド・ハン国時代の総督の暴政について彼に語った逸話（*‘Ālim-1915: 101-102*）や、ペロフスク郡の75歳のカザフ人の古老から聞き取ったケネサル反乱（1837-47）についての逸話<sup>54</sup>（*‘Ālim-1915: 125*）、また、アウリエアタ郡のあるクルグズ人の古老からおなじくケネサル反乱について聞き取った逸話（*‘Ālim-1915: 127*）なども記述の材料としている。

さらに、ムッラー・アーリムは、自身の見聞や観察にもとづく記述もところどころに織り込んでおり、その例は第1章や、とりわけ第2章にみいだすことができる。彼が人生の大半を過ごしたのがロシア統治期であることから、それは当然であった。(7)との関連でいえば、ロシア統治50年にわたっての変化の諸相こそ、ほかならぬ第2章に重点的に書き込まれている。彼は第2章のなかで「歴史上のこの時代はまったく別の時代となりはじめた」（*‘Ālim-1915: 164*）と述べたうえで、ロシア統治下のトルキスタンで起こった肯定的な変化、すなわち治安の改善、交通・往来の活発化、産業・通商の発展、インフラの整備、福利や生活の利便性、教育環境の向上などを前代の状況と対比させながら具体的に説明している（*‘Ālim-1915: 165-168*）。この記述は東洋学者バルトリドの特別な関心を引いた。バルトリドは自著『トルキスタン文化史』の第11章「統治のヨーロッパ化と現地民」において、「『トルキスタン地方新聞』の寄稿者ムッラー・アーリムは、タシュケント占領50周年に寄せて、自身のトルキスタン史概説をロシア支配の利点を列挙することで結んだ」と指摘し、まさに『トルキスタン史』の第2章の記述内容を要約している（バルトリド2011(2): 205-208）。ムッラー・アーリムの歴史記述が当代の碩学の目にとまったことはそれ自体、マスメディア上におけるその反響の一端を示しているといえるかもしれない。

以上のように、ムッラー・アーリムはトルキスタンを対象とする歴史をはじめて書籍として完成させた。彼は時代の要請に即応しながらトルキスタンを歴史化したといえよう。彼にとってそれは自己実現の一環でもあったにちがいない。彼は自著をこのように語る。

この『トルキスタン史』は、まさにわれわれが郷土として住まうトルキスタン地方の状況と事情についてはじめて記した歴史であり、これ以前にトルキスタン地方についての歴史は一つとしてなかったものであり、それが書かれることはたえてなかった（*‘Ālim-1916.2.4: 1*）。

ここには前例のない歴史叙述の成果を世に送り出したという、彼の自負を読みとることができる。

54 著者ムッラー・アーリムは、この逸話の聞き取りは「42年前に」なされたと述べている。

一方で『トルキスタン史』には、彼自身が語ろうとしない、いくつかの側面がそなわっていることもたしかである。彼のジャーナリズム活動とその周辺を見渡すならば、トルキスタンを主要な記述対象に据えるアイデアは、当時のムスリム・ジャーナリズムのメディア上で展開されていたサルト論争やテュルク主義的な歴史論議ともけっして無関係でないことがみえてくる。『トルキスタン史』は、多様なメディアと多彩な論者のあいだにはたらく複雑な力学の産物として、その姿を現したのである。

## おわりに

ムッラー・アーリムの『トルキスタン史』を歴史史料としていかに評価すべきか、ならびに、同書がこれまでいかに評価されてきたのかも検討に値する問題である。

アメリカの歴史研究者オルワース（1920–2016）は、ムッラー・アーリムが歴史叙述を着手すべき課題としてとらえた点ではジャディード知識人と似通っていたことを指摘（Allworth 1990: 23）する一方、次のようにも述べる。

みたところ、ジャディードたちはムッラー・アーリム・マフドゥーム・ハージーの『トルキスタン史』が中央アジアのロシア当局とのつながりによって汚れていると評価したようである。というのも、彼らはこの同時代の年代記編者とその著作があたかも存在しなかったかのごとく、ジャディード流の歴史叙述を追求したからである（Allworth 1990: 24）。

たしかに『トルキスタン史』は、メディア上でその出現を広く知られたはずだが、たとえばオレンブルグの『シューラー』誌の新刊紹介欄で取り上げられた形跡はないし、全体としてジャディードからはそれほど関心を払われていなかったのかもしれない。しかし、ジャディード知識人が一様だったわけではなく、むしろ多様であったことも忘れてはならない。少なくともジャディードと非ジャディードの二項対立のなかで彼やその著作を評価することにこだわるべきではないだろう。

ジャディードとして活動した経歴をもつ人物のなかにも、ムッラー・アーリムの『トルキスタン史』を積極的に参照した例はみいだせる。その代表例がブハラ出身のサドリッディーン・アイニー（1878–1954）である。アイニーは自著『ブハラのマンガト朝アミール史』<sup>55</sup>（*‘Aynī*）のなかで、『トルキスタン史』の記述をたびたび引用している。アイニーがみずからの歴史叙述のために同書を利用したのは、初期ソヴィエト政権下のサマルカンドにおいてであった。ムッラー・アーリムは『トルキスタン史』のなかで旧ハン国どうしの無益な戦争を批判したが、暴君の恣意的な圧政の糾弾を一つの目的としたアイニーの歴史叙述にとっても、その記述内容はさして矛盾せず、有用な情報源として活用されたといえる。

55 当初1920–21年に『革命の炎（*Šu‘la-‘i inqilāb*）』誌に連載記事として発表され、1923年に単行本出版された。

ソ連時代に『トルキスタン史』は、東洋学や歴史学の学問的見地から歴史史料として評価の目が向けられるようになった。上に述べたように、いちはやくこれに注目したのがバルトリドである。歴史学者 P. P. イヴァーノフ (1893-1942) もその史料の価値を検討し、とくに19世紀のフェルガナの歴史に関する情報が貴重であるとの評価を下している (Ivanov 1958: 232)。

ソ連解体と中央アジア諸国の独立は、歴史の見直しや再発見をうながした。ウズベキスタンでは、この流れのなかで『トルキスタン史』にも脚光が当てられ、グロッサリーや注釈をともなった2種のキリル文字翻刻版が刊行されている (*Ālim-1992*; *Ālim-2008*)。しかし、これらの刊本には技術的な不備が少なくない<sup>56</sup>。今のところ歴史史料として学問的分析に十二分に堪えるのは、ひとり初版 (*Ālim-1915*) のアラビア文字テキストのみといわざるをえない。

キリル文字翻刻版が出版されたことで『トルキスタン史』への認知は格段に高まった。しかし、独立イデオロギーとナショナリズムの高揚は、現代の愛国史観を同書の評価に介在させかねない。歴史教科書における次の記述は、その蓋然性を物語っているように思われる。

この著作〔『トルキスタン史』〕はウズベク語で刊行された。そこには旧時代からトルキスタンの20世紀初頭に至るまでの出来事の年代記が説述されている。同書はウズベク語による最初の歴史書として名声を勝ちとった (O'roqov va b. 2013: 313; Tillaboyev va b. 2019: 139)。

独立後のウズベキスタン東洋学の成果として注目されるのが、コーカンド・ハン国に関する歴史叙述と歴史認識を扱った B. M. ババジャノフの研究である。同研究では数々の史書とならんでムッラー・アーリムの『トルキスタン史』にも考察が加えられ、彼の著作は新政治体制へのムスリムの適応の最も顕著な例であると指摘されている (Babadzhanov 2010: 45)。本稿では十分に検討できなかったが、ムッラー・アーリムの歴史観や叙述スタイルを原テキストに即して分析し、著作全体を歴史史料として再評価することは、今後も引き続き取り組むべき課題といえる。

最後に、トルキスタンという概念自体もまた、興味深い研究対象にはかならない。ムッラー・アーリムによるその歴史化は、ロシア統治という政治的要因に大きく規定されていた。ならば、ソ連解体という世界史的な政治変動はトルキスタンという用語の実用性や意義にいかなる作用をおよぼしてきたのか、トルキスタン概念は地域の人々の歴史認識においていかなる役割をはたすのか、なおも検討すべき問題は少なくない。

56 2008年の刊本 (*Ālim-2008*) の不備については、B. M. ババジャノフがこれを指摘している (Babadzhanov 2010: 42-43)。

## 参考文献

●史料（斜体の略称で頭出し・配列）

◆叙述史料（定期刊行物の署名記事含む<sup>57</sup>）

- ‘*Ālim-1905.9.24*: Mullā ‘Ālim Maḥdūm, “Po povodu lozhnykh soobshchenii v gazete «Geiat» o Turkeстане,” *Gazēt*, no. 38 (1905/09/24), 4–6-ş.
- ‘*Ālim-1905.10.1*: Mullā ‘Ālim Maḥdūm, “Po povodu lozhnykh soobshchenii v gazete «Geiat» o Turkeстане,” *Gazēt*, no. 39 (1905/10/01), 5–6-ş.
- ‘*Ālim-1906.02.28*: Mullā ‘Ālim, “Po povodu praktiki kaziev,” *Gazēt*, no. 9 (1906/02/28), 5–6-ş.
- ‘*Ālim-1906.03.15*: Mullā ‘Ālim, “O iazyke izdavaemykh musul’manami knig,” *Gazēt*, no. 11 (1906/03/15), 4–5-ş.
- ‘*Ālim-1906.7.9*: [Mullā Muḥammad ‘Ālim], “Po povodu gazety «Tarakky»,” *Gazēt*, no. 28 (1906/07/09), 2–4-ş.
- ‘*Ālim-1913.1.20*: [Anon. va] Mullā ‘Ālim, “Po povodu pis’ma o slove «sart»,” *Gazēt*, no. 6 (1913/01/20), 2–3-ş.
- ‘*Ālim-1914.7.10*: M[ullā] ‘[Ālim], “Felyetōn,” *Gazēt*, no. 54 (1914/07/10), 2–3-ş.
- ‘*Ālim-1915*: Mullā ‘Ālim Maḥdūm Ḥājji, *Ta’rīḥ-i Türkistān*, Taškānd: Türkistān generāl gubernātorīga tābi’ basma-ḥāna, 1915. [*Sbornik*, t. 588, str. 1–111.]
- ‘*Ālim-1915.6.11*: Mullā ‘Ālim, “Felyetōn,” *Gazēt*, no. 44 (1915/06/11), 2–3-ş.
- ‘*Ālim-1915.6.28*: Mullā ‘Ālim, “Felyetōn,” *Gazēt*, no. 49 (1915/06/28), 2–3-ş.
- ‘*Ālim-1915.7.23*: Mullā ‘Ālim Maḥdūm, “Felyetōn,” *Gazēt*, no. 56 (1915/07/23), 2–3-ş.
- ‘*Ālim-1915.8.6*: Mullā ‘Ālim, “Felyetōn,” *Gazēt*, no. 59 (1915/08/06), 2-ş.
- ‘*Ālim-1915.9.17a*: Mullā ‘Ālim Maḥdūm, “Po povodu slukhov Bobidakh,” *Gazēt*, no. 71 (1915/09/17), 2-ş.
- ‘*Ālim-1915.9.17b*: [Mullā Muḥammad ‘Ālim Maḥdūm], “Istoriia Turkeстана na Sart. iaz.,” *Gazēt*, no. 71 (1915/09/17), 2-ş.
- ‘*Ālim-1915.10.1*: ‘Ālim Maḥdūm Taškāndī, “Bābīlārnin<sup>g</sup> aḥvāl-i ta’rīḥiyasi,” *Al-Işlāḥ*, no. 18 (1915/10/01), 571–572-ş. [(‘*Ālim-1915.9.17a*) からの転載]
- ‘*Ālim-1916.2.4*: [Mullā ‘Ālim Maḥdūm Ḥājji], “Ob “Istoriia Turkeстана,”” *Gazēt*, no. 10 (1916/02/04), 1–2-ş.
- ‘*Ālim-1992*: Mulla Olim Maxdum Hoji, *Tarixi Turkiston*, Nashrga tayyorlovchilar, so‘zboshi va lug‘at mualliflari: T. Alimardonov va N. Abdul Hakim, Qarshi: «Nasaf» nashriyoti.
- ‘*Ālim-2008*: Mirza Olim Maxdum hoji, *Tarixi Turkiston*, Mas‘ul muharrir: Z. Choriyev, So‘zboshi va izohlar muallifi: Sh. Vohidov, Toshkent: Yangi asr avlodi, 2008 (qayta chop: 2009).
- Andreev-1916a*: [G. V. Andreev], “Tarikh’-Turkestan (*Istoriia Turkeстана*),” *Vedomosti*, no. 11 (1916/--/--[日

57 無署名の場合でも、本文の内容から著者が確定できる記事はここに含めた。

- 付未確認) [*Sbornik*, t. 588, str. 112–116].
- Andreev-1916b*: Gr. Andreev, “Pravlenie khana Alima,” *Vedomosti*, no. 17 (1916/--/-- [日付未確認]) [*Sbornik*, t. 588, str. 116–120].
- Avlānī-1924.6.24*: ‘Abdullā Avlānī, “Burunġi özbek vaqtlī matbū‘ātinin<sup>g</sup> ta’rīhi,” *Türkistān*, 295-san (1924/06/24), 2–5-bet.
- ‘Aynī*: Šadr al-Dīn ‘Aynī, *Ta’rīh-i amīrān-i mangītiyya-‘i Buḥārā* (Sadriiddin Aynī, *Kulliyot*, j. 10, Dushanbe: Irfon, 1966).
- Barāt*: Mīrzā Barāt Kātib Samarqandī Mullā Qāsim-oġlī, *Samarqand-i firdavs-mānandnin<sup>g</sup> bayānī*, Taškānd: n.p., 1884.
- Behbūdī-2018*: Mahmudxo‘ja Behbudiy. *Tanlangan asarlar*, I–II-jild, Toshkent: Akademnashr, 2018.
- Behbūdī-1906.4.12*: Samarqandī Maḥmūd-ḥ<sup>v</sup>āja valad-i Behbūd-ḥ<sup>v</sup>āja, “Pis’mo iz Samarkanda,” *Gazēt*, no. 15 (1906/04/12), 5–6-ş.
- Behbūdī-1914.7.12*: [Maḥmūd-ḥ<sup>v</sup>āja Behbūdī], “Türkistān ta’rīhi kerāk,” *Āyina*, no. 38 (1914/07/12), 898–900-ş.
- Bidlīsī*: Šaraf-ḥān b. Šams al-Dīn Bidlīsī, *Kitāb-i Šaraf-nāma*, j. 1–2, ba-ihtimām-i V. Veliyāminof-Zernof, Peterburg: Dār al-ṭibā‘-i Akādemiyya-‘i imperatoriyya, 1860–1862.
- Elphinstone*: M. Elphinstone, *An Account of the Kingdom of Caubul, and Its Dependencies in Persia, Tartary, and India; Comprising a View of the Afghaun Nation, a History of the Dooraunee Monarchy*, London: John Murray, 1815.
- Khanykov*: N. V. Khanykov, *Opisanie Bukharskogo khanstva*, Sankt-Peterburg: Tipografiia Imperatorskoi akademii nauk, 1843.
- Kostenko*: L. F. Kostenko, *Turkestanskii krai. Opyt voenno-statisticheskogo obozreniia Turkestanskogo voennogo okruga. Materialy dlia geografii i statistiki Rossii*, t. I–III, S.-Peterburg: Tipografiia tovarishchestva «Obshchestvennaia pol’za», 1880.
- Marjānī-1885/1900*: Šihāb al-Dīn al-Marjānī al-Qazanī, *Mustafād al-aḥbār fī aḥvāl Qazan va Bulġar*, q. 1–2, Qazan: Maṭba‘ al-ḥizāna, 1885–1900.
- Masal’skii*: V. I. Masal’skii, *Turkestanskii krai*, S.-Peterburg: Izdanie A. F. Devriena, 1913.
- Mīrḥ<sup>v</sup>ānd*: Muḥammad b. Ḥāvand-šāh Balḥī ma’rūf ba Mīrḥ<sup>v</sup>[ā]nd, *Ravzat al-ṣafā*, qismhā-‘i 1-2-3, tahzīb va talḥīş az ‘Abbās Zaryāb, Tihrān: Intišārāt-i ‘ilmī, 1373 HŞ.
- Mu‘īn-1913.1.1*: Ḥājjī Mu‘īn b. Šukr Allāh, “Türkistānnin<sup>g</sup> öġüt ham ötinçi,” *Šūrā*, no. 1 (1913/01/01), 10-ş.
- Niyāz Muḥammad-1885*: Mullā Niyāz Muḥammad b. Mullā ‘Ašūr Muḥammad Ḥōqandī, *Ta’rīh-i Šahrūḥī*, ba-sa’y va ihtimām-i Nikolā Pantūsov, Qazan: Tab‘ḥāna-‘i madrasa-‘i al-kubrā, 1885.
- Pashino*: P. I. Pashino, *Turkestanskii krai v 1866 godu. Putevye zametki*, S.-Peterburg: Tipografiia Tiblena i K<sup>o</sup> (Nekliudova), 1868.
- Rizā-qulī-ḥān-1876/1879*: Mīrzā Rizā-qulī-ḥān Lālābāşī, *Sifārat-nāma-‘i Ḥ<sup>v</sup>ārazm* (Ch. Schefer, *Relation de*

*l'ambassade au Kharezm de Riza Qouly Khan*, 2 vols., Paris: Leroux, 1876–1879).

*Romanovskii*: D. I. Romanovskii, *Zametki po sredne-aziatskomu voprosu*, Sanktpeterburg: Tipografiia Vtorogo otdeleniia Sobstvennoi E. I. V. kantseliarii, 1868.

*Senkowski*: *Supplément à l'histoire générale des Huns, des Turks et des Mogols, contenant un abrégé de l'histoire de la domination des Uzbèks dans la Grande Bukharie, depuis leur établissement dans ce pays jusqu'à l'an 1709, et une continuation de l'histoire de Kharèzm, depuis la mort d'Aboul-Ghazi-Khan jusqu'à la même époque*, par M. Joseph Senkowski, St. Petersburg: Impr. de l'Académie impériale des sciences, 1824.

*Terent'ev*: M. A. Terent'ev, *Istoriia zavoevaniia Srednei Azii*, t. I–III, S.-Peterburg: Tipo-litografiia V. V. Komarova, 1906.

*Zākīrof-1905.10.31*: Mullā Abū Bakr Šūfī oġlī Zākīrof, “Pis'mo iz Namangana. Javāb-i munāzara-'i bēhūda-'i Ibrāhīmof,” *Gazēt*, no. 43 (1905/10/31), 6–7-ş.

◆定期刊行物（略号一覧と参照した無署名記事または編集部執筆記事）

*Al-Işlāh*: *Al-Işlāh*, Taškānd, 1915–1918.

*Al-Işlāh-1915.9.15*: Anon., “Türkistānlıların Türkistān ta'rīhi ilā tabrīk edermiz,” no. 17 (1915/09/15), 537–538-ş.

*Al-Işlāh-1915.10.1*: Anon., “Bābīlārnin<sup>g</sup> aĥvāl-i ta'rīhiyyasī,” no. 18 (1915/10/01), 571–572-ş.

*Āyina*: *Āyina*, Samarqand, 1913–1915.

*Gazēt*: *Türkistān vilāyatının<sup>g</sup> gazēti*, Taškānd, 1870–1917.

*Gazēt-1870.4.28*: Anon., “Ma'lūm-nāma,” no. 1 (1870/04/28), 1-ş.

*Gazēt-1904.12.11*: Anon., “Nagrady General-Gubernatora musul'manam,” no. 49 (1904/12/11), 3–5-ş.

*Gazēt-1904.12.19*: Anon., “Pozhertvovanie v Tashkentskii muzei,” no. 50 (1904/12/19), 1-ş.

*Gazēt-1905.9.10*: Anon., “O kaziiakh v khanskoe vremia,” no. 36 (1905/09/10), 6–7-ş.

*Gazēt-1905.9.17*: Anon., “O kaziiakh v khanskoe vremia,” no. 37 (1905/09/17), 5–7-ş.

*Gazēt-1905.10.8*: Anon., “Po povodu gazety «Geiat»,” no. 40 (1905/10/08), 4-ş.

*Gazēt-1905.12.9*: Anon., “Po povodu soobshcheniia gazety «Geiat»,” no. 48 (1905/12/09), 4–5-ş.

*Gazēt-1915.9.20*: Anon., “Novye knigi,” no. 72 (1915/09/20), 4-ş.

*Gazēt-1915.9.24*: Anon., “Otzv o novoi knige,” no. 73 (1915/09/24), 3-ş.

*Gazēt-1915.11.26*: Anon., “Ilm-i tavārīhnin<sup>g</sup> ĥāşşiyatī va manfa'atī ĥuşūşida,” no. 90 (1915/11/26), 1–2-ş.

*Şūrā*: *Şūrā*, Orenburg, 1908–1918.

*Taraqqī*: *Taraqqī*, Taškānd, 1906.

*Taraqqī-1906.7.5*: Idāra, “An-nāsu 'alā dīni mulūkihim (Felyetōn),” no. 6 (1906/07/05), 2–3-b.

*Türkistān*: *Türkistān*, Taškānd, 1923–1924.

*Vedomosti*: *Turkestarskie vedomosti*, Tashkent, 1870–1917.

## ◆行政府編纂物 (『トルキスタン集成』)

*Sbornik: Turkestanskii sbornik, t. 1-594, 1867-1939.*

## ●研究文献

- 宇山智彦2016.「周縁から帝国への「招待」・抵抗・適応：中央アジアの場合」同編『ユーラシア近代帝国と現代世界』(シリーズ・ユーラシア地域大国論4) ミネルヴァ書房, 121-144頁.
- 2008.「地域認識の方法：オリエンタリズム論を超えて」同編『地域認識論：多民族空間の構造と表象』(講座スラブ・ユーラシア学2) 講談社, 11-36頁.
- 大塚修2017.『普遍史の変貌』名古屋大学出版会.
- 帯谷知可2005.「オストロウモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』76号, 15-27頁.
- 2003.「ロシア革命期の中央アジアにおける「トルキスタン」の政治的領域をめぐって」黒田卓・高倉浩樹・塩谷昌史編『中央ユーラシアの民族文化と歴史像』(東北アジア研究センター叢書13), 東北大学東北アジア研究センター, 77-94頁.
- 香山陽坪1993.「ロシア帝政時代の中央アジア研究」『東海史学』27号, 1-22頁.
- 木村暁2022.「繁栄する青の都：ティムール朝から現代まで」『K』3号, 28-35頁.
- 2008.「中央アジアとイラン：史料に見る地域認識」宇山智彦編『地域認識論：多民族空間の構造と表象』(講座スラブ・ユーラシア学2) 講談社, 39-72頁.
- 小松久男2022.「サルト人とはだれか：近代中央アジアの民族名論争」『西南アジア研究』94号, 59-92頁.
- 2018.『近代中央アジアの群像：革命の世代の軌跡』(世界史リブレット人80) 山川出版社.
- 2008.『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』(世界史の鏡 地域10), 刀水書房.
- 1997.「ソ連邦の解体と中央アジア：トルキスタンをめぐって」辛島昇他編『地域のイメージ』(地域の世界史2) 山川出版社, 364-405頁.
- 1983.「ブハラとカザン」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 481-500頁.
- 塩野崎信也 2017.『〈アゼルバイジャン人〉の創出：民族意識の形成とその基層』(プリミエ・コレクション77), 京都大学学術出版会.
- 陳垣(撰) 1972.『中西回史日曆』臺北：藝文印書館 (初版：北京：國立北京大學研究所, 1926年).
- 長縄宣博2017.『イスラームのロシア』名古屋大学出版会.
- 野田仁2007.「カザフ・ハン国とトルキスタン：遊牧民の君主埋葬と墓廟崇拜からの考察」『イスラーム世界』68号, 1-24頁.
- バルトリド, V・V (小松久男監訳) 2011.『トルキスタン文化史 (1-2)』平凡社. [ロシア語原書：Bartol'd 1927]
- ヘディン (水野勉訳) 1979.『カラコルム探検史 (上)』(ヘディン探検紀行全集 別巻1) 白水社. [英

- 語原書初版：Leipzig, 1922]
- 本田實信 1984. 「イラン」『アジア歴史研究入門：第4巻 内陸アジア・西アジア』同朋舎出版, 593–662頁.
- 吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館 1989. 「魏氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」『神戸市外国語大学外国学研究』19号, 1–50頁.
- Abdirashidov, Z. 2011. *Annotirovannaia bibliografiia Turkestanskikh materialov v gazete «Tarzhumān» (1883–1917)*, Tokyo: TIAS.
- Abduazizova, N. 2008. *Milliy jurnalistika tarixi (Genezis va evolyutsiya)*, I-jild, Toshkent: Sharq.
- 2000. *Turkiston matbuoti tarixi (1870–1917)*, Toshkent: Akademiya.
- Allworth, E. A. 1990. *The Modern Uzbeks: From the Fourteenth Century to the Present. A Cultural History*, Stanford: Hoover Institution Press, Stanford University.
- Babadzhanov, B. M. 2010. *Kokandskoe khanstvo: vlast', politika, religii*, Tokio–Tashkent: Yangi nashr.
- Barthold, W. [Bartol'd, V. V.] 1987. “Turkistān,” *E.J. Brill's First Encyclopedia of Islam 1913–1936*, vol. VIII, Leiden: E.J. Brill, pp. 895–896 [1st publ.: Leiden, 1934].
- Bartol'd, V. V. 1977. “Sostoianie i zadachi izucheniia istorii Turkestana,” *Akademik V. V. Bartol'd. Sochineniia*, t. IX, Moskva: Izdatel'stvo «Nauka», str. 510–521 [1-oe opubl. na nemetskom: Leipzig, 1914].
- 1927. *Istoriia kul'turnoi zhizni Turkestana*, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR [V. V. Bartol'd. *Sochineniia*, t. II, ch. 1, Moskva: Izdatel'stvo «Nauka», 1963, str. 169–433]. [ノバルトリド2011]
- Bertel's, E. E. (glavnyi redaktor) 1954. *Tadzhiksko-russkii slovar'*, Moskva: Gosudarstvennoe izdatel'stvo inostrannykh i natsional'nykh slovarei.
- Borovkov, A. K. 1959. *Uzbeksko-russkii slovar'*, Moskva: Gosudarstvennoe izdatel'stvo inostrannykh i natsional'nykh slovarei.
- Fayzullayev, R. 2008. “*Turkiston viloyatining gazetii*”ga tuzilgan bibliografik ko'rsatkich (1870–1916 yillar), Toshkent: Alisher Navoiy nomidagi O'zbekiston milliy kutubxonasi nashriyoti.
- Ivanov, P. P. 1958. *Ocherki po istorii Srednei Azii (XVI–seredina XIX v.)*, Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury.
- Khalid, Adeeb 1998. *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia*, Berkeley–Los Angeles–London: University of California Press.
- Lunin, B. V. 1974. *Istoriografiia obshchestvennykh nauk v Uzbekistane. Bio-bibliograficheskie ocherki*, Izdatel'stvo «Fan» Uzbekskoi SSR.
- Morrison, Alexander 2021. *The Russian Conquest of Central Asia: A Study in Imperial Expansion, 1814–1914*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Nepomnin, V. Ia. “Prevrashchenie Uzbekistana v koloniiu tsarskoi Rossii,” *Istoriia Uzbekskoi SSR*, t. II, Tashkent, 1968, str. 39–68.
- O'roqov, D. va A. Sharopov 2013. *O'zbekiston tarixidan universal qo'llanma*, Toshkent: Akademnashr.

- Qosimov, B., Sh. Yusupov, U. Dolimov, Sh. Rizayev va S. Ahmedov 2004. *Milliy uyg'onish davri o'zbek adabiyoti*, Toshkent: «Ma'naviyat».
- Qosimxonov, B., H. Lutfillayev va Sh. Islamov 2014. *O'zbek tilidagi toshbosma kitoblar katalogi*, 1-jild, Toshkent: «Munis design group» MChJ bosmaxonasi.
- Shadmanova, S. 2011. "Ustnye vospominaniia mully Alima (nachalo XX v.)," *Ustnaia istoriia v Uzbekistane: teoriia i praktika. Sbornik materialov konferentsii*, vyp. I, Otvetstvennyi redaktor: R. M. Abdullayev, Toshkent: Institut istorii AN Ruz.
- Terskii, P. A. (avtor ideii i sostavitel') 2008. *Atlas. Turan na starinnykh kartakh: Obraz prostranstva—Prostranstvo obrazov*, Moskva: IPTs «Dizain. Informatsiia. Kartografiia».
- Tillaboyev, S. va A. Zamonov 2019. *O'zbekiston tarixi (XIX asrning ikkinchi yarmi–XX asr boshlari)*, Umumiy o'rta ta'lim maktablarining 9-sinfi uchun darslik, Qayta ishlangan va to'ldirilgan uchinchi nashr, Toshkent: Sharq (1-nashr: 2010).